

*Fillmore*TM 100

取扱説明書

Hello from the Tone Farm

この度はFILLMORE™をご購入いただきありがとうございます。そしてMESA/Boogie®ファミリーへようこそ！あなたが選んだこのアンプは、ビンテージ・チューブアンプが持つ最上級の品格と、革命的な発明であるスイッチングで切替可能なハイゲイン・チャンネルを併せ持ったモデルとして深い伝統をまっています。このアンプが持つ完璧な機能性を一目みれば、それがあらゆるものをインスパイアするツールを満載しながら、その中身はかつてMESAのMARK I™や最初期のモダン・ギターアンプ(偽物にご注意下さい)の革新的な回路や機能の伝統に基づいています。ですから、我々はあなたの選択をお祝いしたいと思います...いかなる点でも比類の無い、オリジナルであるこのアンプを演奏すれば誇らしい気持ちになることでしょう！まさにあなたのように！

我々は45年以上に渡って、素晴らしいものを提供することをミュージシャンに対しての真摯な約束として考えており、我々自身がそうして欲しいと望むように、1人1人の方に対応しており、選択したアンプについて本当に納得してもらえることを保証しています。また我々は、あなたの新しいアンプがあなたを微笑ませ、最初にアンプにプラグインしてからもの数分であなたをインスパイアさせる自信があります。ですが本当に喜ばしいことは、最初にお金を払ったことが記憶から消し去られた後に、さらにあなたが新しくそしてインスパイアされるサウンドを発見することであり、FILLMORE™はその真の価値を表し続けるでしょう。

我々は、ご自身のサウンドを実現するためにMESAの製品を選んで下さったことに感謝すると同時に、日々の努力が報われる手助けが出来ることを願っています。この取扱説明書は、それを実現するのに役立つことでしょう。あなたは今、限りない表現力を持つ楽器を手に入れているのです。さあ、遙かなる音楽の旅に出かけましょう。MESA®のスタッフ全員があなたを応援します！

Fillmore™ 100

Table of Contents

使用上の注意	
OVERVIEW	1-3
GETTING STARTED	4
役立つヒント	4-5

FRONT PANEL

FULL/HALF/LOW POWER	5-6
GAIN	6-7
TREBLE	7
MID	7-8
BASS	8-9
PRESENCE	9
REVERB	9-10
MASTER	10
CHANNEL SELECT	10
MODE SELECT	10
POWER	10
STANDBY	10-11

REAR PANEL

電源コネクタ(リアパネル下側)	11
FUSE	11
EFFECTS LOOP (SERIES)	11-12
REVERB FOOTSWITCH	12
SPEAKER OUTPUTS	12-13
FACTORY SAMPLE SETTINGS	14-15
USER SETTINGS	16-17
TUBEトラブルシューティングガイド	18-19
スピーカー・インピーダンス・マッチングと接続ガイド	20-23
TUBE タスクチャート	24
パーツリスト	25

使用上のご注意

この説明書を読んで下さい。

この説明書をなくさない様に保管して下さい。

注意事項を必ず読んでからお使い下さい。

安全事項にも従って下さい。

水の近くで当製品を使用しないで下さい。

汚れた時は乾いた布で拭いて下さい。

換気口を塞がないで下さい。説明書に従って設置して下さい。

暖房機器や、他のアンプなど、熱を発生する機器の近くに置かないで下さい。無理やり、形の違うコンセントに挿さないで下さい。有極プラグは片方のブレードが幅広くなっています。アース付プラグは2つのブレードの他にアース端子も付いています。アースは安全の為のもので、自宅のコンセントに差し込めなかった場合、電力会社に相談して下さい。

電源ケーブルを踏んだり、曲げたりしないで下さい。

落雷の恐れがある時や、長時間使用しない時は電源ケーブルを外して下さい。

修理が必要な時は専門家に依頼して下さい。ケーブルがダメージを受けたり、本体が傷ついたり、濡れたり、落として壊れたりした場合、修理に出して下さい。

換気の為に本体の後ろに必ず10センチ程度のスペースを空けて下さい。換気口の上に新聞、テーブルクロスやカーテン、といった物を置かないで下さい。

ロウソクや火が付くような物を本体の近くに置かないで下さい。

濡れている物も本体の近くに置かないようにして下さい。

注意:安全のため、本体を雨や湿気に晒さないで下さい。

なるべくコンセントの近くに設置して下さい。

注意:必ず適切な接続をしてからアンプを操作して下さい。そうしないとアンプが故障する可能性があります。

直射日光や高い湿度は避けるようにして下さい。

必ずアースを接続して下さい。

解体したり、ヒューズやチューブを交換したりする前に必ず電源ケーブルをコンセントから外して下さい。ヒューズを入れ替える時は、必ず同じタイプのヒューズを使って下さい。

動作中にチューブに直接触れないで下さい。

子供に触らせないで下さい。

故障を避けるため、ケーブルなどを接続する前に電源を切って下さい。

汚れを取るのに溶剤を使用しないで下さい。

必ず本体の裏に表示されている条件を満たすAC電源を使用して下さい。輸出モデルは各国の電圧に合わせてあります。お住まいの規定に従って電源に接続して下さい。

大きな音が出ますので、スピーカーに耳を近づけないで下さい。

Mesa/Boogieアンプはプロスペック用の機材ですので、規定に従って扱って下さい。

上記の取り扱い注意事項と安全管理事項を必ず読んで下さい!

Fillmore™ 100

取扱説明書

OVERVIEW

現代において100W出力のギターアンプというものは絶対的に必要な製品ではないかもしれませんが、Fillmore™ 100は大出力アンプのトーンの本質を再認識させてくれる製品です。“大きなトーン”というのは必ずしも大音量のボリュームを意味するわけではなく、扱いにくい重量があるアンプから奏でられるわけではありません。

Fillmore™ 25と50に対する称賛の声が世界中からいまだに届く中、このアンプのサウンドとフィールを支持しつつもアディショナルカバレッジの必要性を感じているアーティストもいました。豊かなトーンでヴィンテージボイシングサウンドを生み出すFillmoreのプリアンプのトーンはそのままに、どんなサイズの会場でも対応できるパワーセクションと組み合わせる方法が唯一のアップグレード方法でした。Fillmore 100は、開発時に我々が予想していた結果を遥かに上回る製品に仕上がりました。自分たちの耳と手を疑うほどの仕上がりでした！

100Wになったことでクリーンヘッドルームと音の厚みが確実に増しましたが、最もその恩恵を受けているのは、Fillmore 100のトーンとサウンドのフィールです。よりダイナミックなニュアンス、パーフェクトな周波数によるよりエキサイティングなセッティング、ゴージャスなアタック・エンベロープ、サウンドの立体感が増し、そして低い周波数の優れたトラッキングなどのその全てがFillmore 100をより際立たせるだけでなく、大出力アンプならではの魔法のようなトーンが望まれる場所ならどこでも優れたトーンを生み出します。

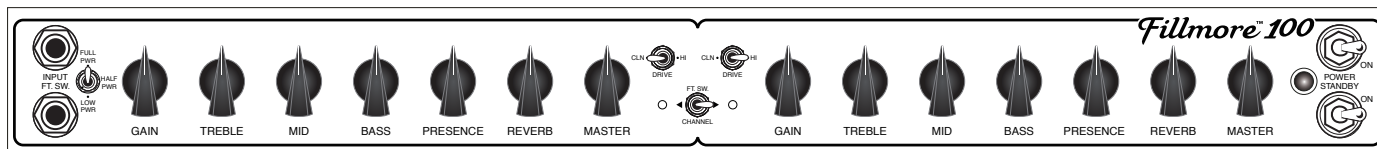
ボリュームに関係なく、100Wアンプに勝るものはありません。言葉で表現するのは難しいことですが、Fillmore 100はMESA/Boogieが何十年にも渡り創り出したいと追い求めていたサウンドを一番捉えたアンプです。MESA/Boogieが追い求めていたサウンドとは、エンベロープが美しく、小型アンプの心地よいフィールと表現力をつづしてしまわない大型アンプのサウンドです。

Fillmore 100には3ポジションのトグルスイッチで切替ができるPower Selectスイッチも搭載しており、FULL、HALF、LOWの3段階での出力切替が可能です。この汎用性の高い機能により、最適な出力レベル、サウンド、フィールを好みのプリアンプモードや使用環境に合わせて選択することができるのです。

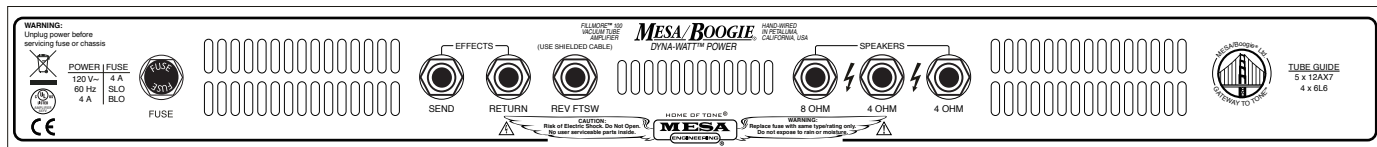
そして、100Wアンプにも関わらず驚異の可搬性を実現していますが、その理由はFillmore 50と同じWidebody™サイズの1×12 Comboのキャビネットを採用しているからです。アンプとスピーカーをセパレートで使用したいユーザーは、Fillmore 100ヘッドを使用することでキャビネットのチョイスと配置のオプションがさらに広がります。

Fillmore 100のサウンドの幅と深さ、立体感、オーソリティを間違いなく堪能していただけると確信しています。象徴的なギターレコーディングに最高のパフォーマンスを誇る100Wアンプが使用されてきたのには理由があります。“大きなトーン”を奏でるからです。これまで我々が製作してきた中でも最もソウルフルなサウンドを奏でるプリアンプのうちの1つと、100W出力の空間を埋め尽くすような立体的なサウンドが組み合わせたFillmore 100を一度体験すると、こう表現しても間違いではないでしょう。・・・一度大きなトーンを体験すると、もう小さなトーンに戻ることはできないと！

FRONT VIEW: FILLMORE™ 100



REAR VIEW: FILLMORE™ 100



IDENTICAL CHANNELS(同一チャンネル)

FILLMORE™は2つの同じレイアウトのチャンネルを備えています。クリーン～オーバードライブの全てのニーズをカバーする3つのモードがあり、事実上、想像しうる全てのサウンドをその中で見つけることができます。

私たちは何十年にもわたって、ほとんどのプレーヤー、特にFILLMORE™が目指すスタイルのカテゴリーでは、同じゲインストラクチャーのわずかなバリエーション、またはサウンド的に密接に関連した異なるゲインストラクチャーを使用する傾向であることを発見しました。Fillmoreの同一チャンネルのプラットフォームは、非常に幅広いスタイルとプレーヤーのためのフットスイッチで切替可能な2チャンネルのフォーマットで、最大のフレキシビリティを実現しています。

2つのチャンネルのモードをCLEANに設定し、1つを完全クリーンのコードワーク用に、もう1つをプッシュ、もしくはソフトクリップさせたコードワークやシングルノートでのプレイで使用したり、お好みのオーバードライブペダルと合わせて使用することができます。他にも、いずれかのゲインモードを使用したクラシックなクリーンとオーバードライブサウンドの組み合わせや、さらに、チャンネル1のDRIVEモードでランチリズムサウンド、チャンネル2のHIモードでハイゲインのリードトーンを設定することもできます。Fillmoreのチャンネルレイアウトとモード機能によって、サウンドの組み合わせに無限の可能性があるのです。それら全てを探求し、自分に最もマッチするサウンドと切替可能なオプションをどう使用するかはあなた次第ですが、MESAでは何よりもそれを簡単かつ直観的に行えることがベストであると考えました。

THE CHANNEL MODES

CLEAN

Fillmoreのプリアンプの構造は、ハスキーなヴォイスिंगで簡単にクリップさせることができる1950年代の“Tweed”アンプの回路に寄せたデザインとなっていますが、CLEANモードでGAINが半分以下の低い設定のときには、カリフォルニアで長年愛されてきたレジェンドアンプとも呼ぶべき1960年代のBlackfaceアンプの回路に寄せたサウンドになるようにデザインされています。GAINコントロールが1時以下の設定のときには、豊かな輝く高域をともなったワイドレンジの美しいクリーンサウンドとなります。

CLEANモードのサウンドのアップパーエンドがクリップするまではこのようなサウンドをキープしますが、3時以降に近づくにつれて実際のクリッピングサウンドの領域に入ってくると、このアップパーレンジが信じられないほどめまぐるしく変化するレスポンスをもたらします。この高域の透明なきらめきは、クリッピングしてサチュレートしているときに、サウンドがうるさすぎずかつ薄くもならず完璧なトップエンドにスムーズに移行します。歪んでいないのに音がサステインするようなイメージに近くなります。それは私たち全てのギタープレーヤーが夢見るトーン、あるいは少なくともソロをプレイするときに欠かせない要素としてサステインを必要とする、全てのプレーヤーのためのトーンです。

この2つの異なるトーンが移行するゾーンは1時～3時で、トーンの太さ、プッシュ感やカラーをギターのボリュームコントロールで操作すれば、多くのプレーヤーがパーフェクトな“CLEAN”を手に入れることができます。同様にオーバードライブペダルとも相性が良く、トップエンドはしっかりとキープしながらも、サウンドが過度に尖ってしまったり、バズが追加されたりするようなことはありません。この中間のゾーンは、さまざまなギターのタイプ、プレイスタイルやオーバードライブペダルと組み合わせても非常にマッチする優れた特性を備えています。このゾーンよりも下側の設定にあたるピュアクリーンサウンドのゾーンや、その上側のゲインリッチなゾーンよりも幾分狭い範囲になりますが、これらのポピュラーともいえるトーンの中間に挟まれたゾーンでローエンドとトップエンドのレスポンスの便利なグラデーションになっています。

DRIVE

DRIVEモードは、クリーンでもなく深いサチュレーションサウンドでもないちょうど“中間”の、トリッキーで難解なギターサウンドにおける本来のドライブサウンドのモデルとなっています。このモードでは、CLEANモードでもっとも歪ませたポジション(実際にはGAINを回しきったポジションよりも少し前)から、HIモードで得られる半分ほどのほぼ“ハイゲイン”の状態までの歪みを得ることができます。しかし、より丸みと暖かみのあるHIモードのヴォイスिंगとは異なり、DRIVEモードではCLEANモードにも似たトップエンドのレスポンスを備えています。このナチュラルなトップエンドはハーモニクスをもたらす、コンプレッションがほとんどないレスポンスを可能にするため、コードワークや豊富なダイナミクスを伴ったシングルノートのソロワークに非常に適しています。

CLEANモードと似たキャラクターをもつDRIVEモードでは、GAINコントロールの12時のポジションより下の領域にフィルタリングされていないハーモニクス成分を多く含んでいます。そのポジションを超えるとよりオーバードライブしたキャラクターが支配的になり、最終的に3時のポジションを超えるとさらにサチュレートしたサウンドが生成されます。HIモードとは異なり、この状態になってもアップパーレンジはしっかりとトップエンドをキープし、用途にもよりますが、スムーズなシングルノートのソロサウンドを求める場合にはTREBLE、MID、PRESENCEのコントロールが重要になります。これらのトーンコントロールはそれぞれがMID成分を含むトップエンドを備えているので、

適切なブレンドになるように試してみてください。このコントロールの比率はコードワークにはそれほど重要ではありませんが、GAINコントロールを上げていくにつれて全体的にかなりのハーモニクスを含んでいきます。Indy Rockや "Nashville Clean" スタイルの多くで必要とされるように、これはオーバードライブしたコードワークを表現力豊かに妨げることなく“オープンに”響かせる目的があります。スムーズで歌うようなシングルノートのソロを求めるとすれば、上記の3つのトーンコントロールを低い領域で設定する必要があります。

HI HIモードは、各チャンネルの3つのモードの中で最もハイゲインで、DRIVEモード同様に繊細な表現力のクリップから激しいオーバードライブまで幅広いサチュレーションサウンドを備えています。DRIVEモードとHIモードのオーバーラップはGAINコントロールのセンター付近までで、そこから上の領域では、モダンなメタルサウンドを除けばほとんどの場合で十分なサステイン、ハーモニクス、コンプレッションを引き出し、全ての真空管のサチュレーションをさらに解放し始めます。そのサウンドのテーマは、数多のレコーディングで使用されてきた70年代後半～80年代前半のCrunch RhythmやLeadサウンドに敬意を払ったものとなっており、当時のMESA/Boogieアンプのサウンドと、同時に人気のあったクラシックなブリティッシュアンプのサウンドを最高の形で追求したものとなっています。このモードは、50年代にカリフォルニアで誕生したすばらしいツイードカバーのアンプに近いアメリカンな回路に仕上がっています。GAINコントロールを12時以上に設定したときにピーストとも言うべきサウンドが現れるように、レースショップでのアプローチと通常の“Tuning(チューニング)”を合わせた、MESA/Boogieでは“Toning(トーニング)”と呼んでいる作業が施してあります。

HIモードではまた、トップエンドがやや丸くなり、ハーモニクスがより良いシングルノートのレスポンスと歌声のようなキャラクターを生み出すように形成されています。このヴォイスイングはシングルノートのソロプレイに非常によくマッチしているため、メロディーワークでの歌うようなトーンを可能にします。また、TREBLE、MID、PRESENCEを少し高めに設定すると、DRIVEモードのヴォイスイングに近くなることがあります。しばしば、特にDRIVEモードのサウンドからHIモードへ移行したときに、最初はサウンドがつかまったり、ロールオフしていたり、“オープンではない”ように聴こえることがあるかもしれません。これは、私たちの仕事においては非常によく知られていますが、必要以上にEQを操作することで求めるサウンドを見失ってしまうEQハングオーバーに陥った状態です。明るいサウンドからより暖かみのある、ダークなサウンドに移行するときによく発生しますが、これはミッドレンジ周波数においても発生します。ミックス内のミッドが非常に少ないサウンドでは、ミッドレンジ成分がそのまま“箱鳴り”または“鼻にかかった”トーンとなります。ほとんどのサウンドでそういった傾向があり、少し時間を置いて耳を調整した後で聴くことで判別することができるでしょう。

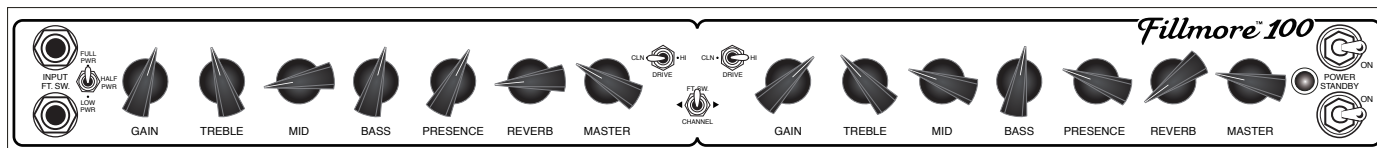
一部のプレイヤーは、楽器側のボリュームコントロールの調整だけで、HIモードでクリーンとオーバードライブサウンドの両方を使い分けています。ボリュームポットをロールバックしたときにピックアップのサウンドがどの程度明るくなるかはギターにもよりますが、これは確かに両方のサウンドを得るのに有効な方法です。しかし、DRIVEモードではトリミングされたハーモニクスが少ないので、最適なオーバードライブサウンドに必要なサチュレーションの量に応じて、全てのゲインストラクチャを網羅するには1つのモードを使用の方がDRIVEモードでは良い結果が得られます。これは、事実上フィルモアの2チャンネル構成においてさらに別のサウンドオプションを加えることができますが、同一2チャンネルの仕様においては好みサウンドを別のサウンドのために犠牲にする必要がないことを忘れないでください。

GETTING STARTED

1. アンプを箱から出したら、全ての真空管がソケットにしっかりと取付されていることを確認してください。
 2. 電源ケーブルを接地された(3ピン)コンセントに接続します。
 3. フットスイッチを箱から出して、付属のモノラルケーブルでフロントパネルの一番左のFT. SW.ジャックに接続します。
 4. ヘッドタイプの場合は、スピーカーエンクロージャーをリア・パネルの適切なインピーダンスマッチングしたSPEAKER OUTPUTに接続します。通常は8ΩのSPEAKER OUTPUTジャックに接続します。初めてこのダイナミックで爆発的なレスポンスを誇るアンプを使用する場合は、最大限のパワーポテンシャルと最高のトーンバランスを確かめるために8Ωの負荷での使用が望ましいでしょう。コンボタイプは8Ωスピーカーを内蔵しており、適切なインピーダンスのSPEAKER OUTPUTに既に接続されています。そうでない場合は、スピーカーケーブルを8ΩのSPEAKER OUTPUTジャックに接続し直してください。
 5. POWERスイッチをONにした後、STANDBYスイッチはSTANDBYのポジションで30秒以上待機します。これにより、真空管内でフィラメントが使用される前にウォームアップされます。このコールドスタートの手順を毎回行うことで真空管の寿命が向上します。
 6. エフェクトプロセッサをEFFECTS LOOPに接続する場合は、ここで接続してください。適切な接続と操作についてはこのマニュアルのEFFECTS LOOPの項を参照してください。まず最初に、プロセッサを使用せずにアンプのサウンドをチェックすることをお勧めします。プロセッサを使用する前にアンプオンリーのサウンドを聴いてアンプそのもののサウンドを知ること、プロセッサがアンプのサウンドを損ねた場合に気がつくことができるでしょう。Loopを使用する場合は、プロセッサ側のINPUTレベルが中～低設定かチェックして、FILLMORE™のSTANDBYをONにしたならレベルをゆっくりと上げていってアンプからのSENDレベルを確認してください。
- NOTE:** ペダルタイプのプロセッサには、クリッピングライトを搭載しているものもありますが、入力レベルインジケータを搭載していない場合があります。このようなタイプのパダルにおいては、聴感上の感覚を頼りにレベル調整を行ってください。
7. 以下のサンプルセッティングにしたがって、TONEの新しい世界を巡るツアーに出るためにまずはこれらに近い値でコントロールを設定してください。このセッティング例は、膨大なサウンドの可能性を垣間見るだけのものであり、チャンネルの設定を行うための1つのサンプルだということを忘れないでください。あなたの思い通りに自由にサウンドを調整してみてください...音色が損なわれることはありませんし、それが最高のサウンドを出すための方法なのです。
 8. STANDBYをONにして演奏を楽しんでください!

サンプルセッティング

アンプをまだ演奏していないのであれば、このサンプルセッティングはチャンネルを設定する多くの方法のうちの1つの例に過ぎません。こちらは、チャンネル1のクリーンサウンドと、チャンネル2のメディアムゲインソロサウンドのサンプルセッティングになります。



役立つヒント

NOTE: 重複する情報について: このマニュアルを読み進めていくにつれて重複する情報やセクションが出てくると思いますが、これは注意喚起のために繰り返されています。興味のあるセクションしか読まない方にも注意を向けてもらうことができ、またFILLMORE™について知っておかなければならない重要なポイントを繰り返している場合もあります。最初から最後まで漏らさず読む方にはご迷惑をおかけしますが、将来このマニュアルの特定の部分を素早く参照する際に有効になるはずです。

・DRIVEモードとHIモードでは、特にGAINが高めの設定のときにはBASSコントロールをあまり高く設定しないように注意して下さい。BASSコントロールを過度に上げると、アタックがぼやけてレスポンスが遅くなります。基本的なルールとしては、GAINを上げるときはBASSの設定を下げてください。

・各モードにおけるGAINとTREBLEコントロールは、最もよく効くトーンシェイピングコントロールであるため、調節の際には注意が必要です。それらは全てのモードにおいてアタックの性格やサウンドの方向性のほとんどを決定します。全てのモードで聴くことのできる優れたサウンドの多くは、これら2つのコントロールが真ん中くらいの設定のときに発揮されます。

NOTE: GAINが高めに設定されているときは、真空管のマイクロフォニックによる金属的なノイズを発生させないためにTREBLEの設定をあまり高く(2時以上)上げないようにして下さい。

・アンプを演奏するときは、少なくとも1台のスピーカーキャビネットをフロアに接地させて、その同じ場所で立って演奏した方がサウンドがより良く聴こえたり感じたりするかもしれません。アンプ(またはスピーカー)をフロアに置くことで、共鳴効果や、特に低域が伝わることによって、アンプのサウンドが太くなり、また弦の感触をしっかりと感じ取れます。ステージのような木製のフロアだと本当に素晴らしいので是非試してみてください・・・ギターというのは面白い楽器で、2日続けて同じサウンドに聴こえるということがあまりなく、毎晩、または演奏する環境によって異なるように感じますので、あらゆるメリットを活かすべきです。この方法は大抵の場合に役立ちますが、1つ例外を挙げるならステージ上にたくさんのマイクが設置されているときです。そのような場合は、共鳴したフィードバックを最小限にするためにアンプをステージから高く設定する必要があるでしょう。

・アンプの電源がONの時は、常にSTANDBYスイッチを使用して下さい。セッティングやケーブル接続の合間等、数分でも演奏しない時は常にです。そうすることで、真空管の寿命を延ばすことができます。

・FILLMORE™のような、MESAの持つもう1つの(MARKシリーズではないアンプのような)側面から生み出された回路では、TREBLEとPRESENCEを低めに設定することでバランスの取れたウォームなサウンドが得られます。ギターの木材やピックアップ、演奏技術によっては、これらのコントロールが12時以下の設定であったり、必要であれば反時計回りに完全に切った状態であっても素晴らしいサウンドになることもあります。これはMIDコントロールの帯域がトップエンドの一部もカバーしているため、カットしたトップエンドを補っているためです。

・FILLMORE™ではTREBLE、MID、PRESENCEの3つのコントロールが、それぞれ独自のトップエンドの帯域を持っています。これらの強力なコントロールが全体のミックスに対してどのように作用するか、そしてお好みのスタイルやキャラクター、レスポンス、アタックのセンターポイントに応じてどのようにトップエンドを使い分けかを考えてみましょう。早いうちに少し時間を費やしてトーンやダイナミクスのコントロールに慣れていただければ、音作りにかかる時間を短縮でき、アンプの楽しみ方をより広げることができます。

FRONT PANEL

FULL/HALF/LOW POWER

Fillmore 100には、FULLパワー、HALFパワー、LOWパワーのモードでアンプを使用することができる3段階切替のPower Selectスイッチを搭載しています。パワー管の配線スタイルを含む回路素子を切り替えることでこのような出力の選択を可能としています。具体的な組み合わせは、FULL = 4 x 6L6/Pentode、HALF = 2 x 6L6/Pentode、LOW = 2 x 6L6/Triodeで、低出力選択時はサウンドに少し温かみが増し、ミッドレンジのパンチ感が少なめなサウンドとなります。

FULLでは、最大のヘッドルームでよりサウンドがはっきりし、タイトなアタック感と低周波数帯のサウンドをよりトラッキングします。オーソリティとクリーンヘッドルーム、最大のパンチが必要な時や、大きな会場で演奏をしたり大人数でのアンサンブルの場合に使用する設定です。Fullパワーモードを使用すると豊かなサウンドに仕上がるだけでなく、ローエンドにより鮮やかさが出ます。3モードの中で一番サウンドの幅や立体感も表現されます。

HALFでは、4本搭載されている6L6管のうち2本をスタンバイモードにすることで全体の出力を約半分に減らします。このモードを使用時には、8Ωのインターナルスピーカー/キャビネットを4ΩのSPEAKERアウトプットで使用して異なるレスポンスを試すことも可能です。

NOTE: HALF PowerとLOW Powerに関して

トップエンドの保持/アクセントとミッドレンジのわずかにスクープする“技術的に正しい”負荷での接続を好むプレイヤーもいますが、インピーダンスのミスマッチにより発生するトップエンドのわずかなロールオフを好むプレイヤーもいます。8Ωのスピーカーアウトプットから4Ωの負荷へ接続するといったような、負荷が下回る接続さえ行わなければアンプに損傷を与えることはありませんので、自由に負荷を試してください。4Ωのスピーカーアウトプットから8Ωの負荷への接続(2倍にする)は問題ないので、アンプが損傷することはありません。ただし、8Ωのスピーカー/キャビネットを8ΩのSPEAKER OUTPUTジャックに接続したまま他の接続を行うと、アンプの全出力がスピーカーに供給されなくなり、実際の半分出力値より少し低くなりますが、それでも心配する必要はありません...求める音響特性に最も適した負荷を選択してください。

LOW PowerはHALF Power同様に2 x 6L6駆動となり他2本の6L6はスタンバイモードのままですが、このモードでは、パワー管の駆動方式がPentodeのワイヤリングからTriodeのワイヤリングに切り替わります。これにより、ワット数がさらに(HALF時より約25%)減少し、ウォームで、甘く、中域のパンチが少し抑えられた、わずかに明るいサウンドとなります。このパワー設定は、CLEANモードでのクリップしたリズムサウンドまたは単音でのソロプレイに最適ですが、DRIVEおよびHIGHモードでのオーバードライブサウンドにも同様に機能します。高音域が抑えられ、中域のアタック感が控えめなシルキーで緩やかなレスポンスになります。LOW Powerは、小さな会場やラウドな音量を必要としないレコーディングでの使用、またはアンプの全体的な音量を下げたい場合に便利です。1つだけ例外なのは、HIモードで非常に高いゲイン設定時に正確なローエンドのトラッキングが必要な場合です。その場合は、HALFまたはFULL PowerでMASTERを希望の演奏レベルまで下げることをお勧めします。

パワーセクションの特徴、もしくはサウンドのバリエーションとしてよりオーバードライブを求めている場合にはHALFもしくはLOWモードを使用してください。これらのモードではアンプのパワーバンドにより入りこむため、真空管をよりドライブさせることにつながります。その結果、小さな会場で使用した際、50Wもしくは25Wで使用した際にアンプの特徴をより耳で感じることができます。ただし、FULLの設定時は、アンプがローエンドをより良くコントロールし、よりクリーンなヘッドルームと、より鮮やかで、図太く立体的なサウンドを生成することを忘れないでください。

突き詰めると、出力切替スイッチの機能は出力と音量についてよりも、レスポンス、フィール、およびトーンの変化に対してより関係します。我々は実際、最高のサウンドの広がり、鮮やかさなどの全体的なサウンドを感じることができるので、アンプを常にFULL Powerで駆動させることを好みます。

多くのハイゲインプレイヤーが好む、よりプリアンプの特徴が出るMASTERを低くセッティングしたFULLモードのコンビネーションを思いのままに探求してみてください。それとは逆の、MASTERを高めに設定してHALFまたはLOWモードで使用すれば、トラディショナルなサウンドを求めるプレイヤーがよりオールドスクールでオーセンティックなフィーリングのサウンドに仕上がるでしょう。このような説明をしましたが、FULL、HALFもしくはLOWパワーで、あなたの望むサウンドが作り出せないと言っているわけではありません。ご心配なく、上記で説明したサウンドは、プレイヤーの間で長年定説とされているサウンドの傾向というだけです。どの使用方法でも、ここでの出力切替の選択でFillmore 100のパワーレスポンスと魅力を堪能するという点において、さらなる汎用性をあなたにお届けします。

GAIN

GAINはプリアンプセクションで最もパワフルなコントロールで、サウンドのスタイルや個性に大きく影響します。ゲインを調節してインプットステージのヘッドルームを設定することで、サウンドがクリーンになるかもしくはオーバードライブし始めるかを決定します。また、チューブステージのゲインの増減に伴って繊細なトーンコントロールとしても機能し、サウンドに独自の“カラー”を与えます。

GAINコントロールには大きく分けて3つのレンジがあります。8:00~11:30はローゲインのゾーン、11:00~2:00はよりサチュレーションが強くウォームなサウンドのゾーン、2:30~5:00はさらに高いゲインのゾーンです。いずれも様々な場面で応用でき、コード弾きにもソロにも使うことができます。GAINコントロールでレンジを変えると、トーンの感触やキャラクターも段々と変化していきます。

一般的に、一番低い9:00~11:30のポジションはブライトでオープンかつダイナミックレンジの広いサウンドを生みます。この範囲はクリーンで輝くようなコード弾きをするのに最適です。最大限のヘッドルームと溢れるようなトップエンドの倍音、そして素早いアタックを得られます。DRIVEモードとHIモードは、ゲインがわずかなこのゾーンでスレッショルドサウンドを出力するように調整されていますが、ギターが本来持つキャラクターが損なわれることはありません。サチュレーションによって圧縮されていないダイナミクス豊かなサウンドがそのまま残っているため、DRIVEモードとHIモードではクリッピングしたコードワークに使用するのに最適です。

11:00~2:00のミドルレンジは最もバランスの取れた領域で、ウォームで豊かなサウンドときめ細かいアタック、そして程よいダイナミクスが特徴です。CLEANモードでは、素晴らしいコードワークのレスポンスと豊かさ、そしてまたコシのあるサウンドが得られます。ピックアップの種類や出力の強さにもよりますが、ここはヘッドルームが減少を始める、ゲイン的にクロスオーバーするポイントの近くであるため、クリーンサウンドとかすかなサチュレーションの間でクリップしないように注意しなければなりません。DRIVEモードとHIモードで最も表現力豊かな最高のサウンドのいくつかはこのゲイン領域で得られますが、理由は音がここから良い感じにこもり始め、美味しいチューブ・オーバードライブのサウンドが得られるからです。DRIVEモードとHIモードで12:00ぐらいに設定すると、コードワークをクリップさせたりシングルノートでのプレイにマッチした十分な歪みが得られますが、コンプレッション感はそれほど強くはありません。

最も高い2:00~5:00の範囲は全てサチュレーションがかかったサウンドです。この範囲ではローエンドが太くなり、トップエンドが後退して丸みとコンプレッション感のあるサウンドになります。ピークが低くなることでダイナミクスは遅くなり、スムーズでより滑らかなフィールになります。GAINコントロールをトップエンドに設定すると、インプットステージが歪み始めてすばらしいプッシュサウンドを生み出します。この範囲では、トラディショナルな“クリーンの回路”が、表情豊かなヴィンテージインスパイアされたソロプレイに適したサウンドに変化します。また、ハイゲインの設定でもダイオードや真空管を搭載したオーバードライブペダルとも非常にマッチします。

GAINコントロールを最大にした時に、この“トラディショナルな”アンプがどれだけアグレッシブなサウンドを出せるか聴いたら驚くかもしれません。クランチでのリズムギターやロックのソロプレイでその真価を発揮します。モダンメタル以外ならどんなスタイルにも十分に使えるゲインを備えています。コードプレイによくマッチする厚みのある倍音も、シングルノートでのプレイに適した表情豊かでニュアンスのあるオーバードライブサウンドも生み出せます。

GAINを最大にすると、トーンコントロールの効きが弱くなるように感じるかもしれません。これは各音に非常に強いサチュレーションがかかり、そのキャラクターは回路の全体的なポイシングによってあらかじめ決定されているためです。

FILLMORE™は、TREBLE、MID、PRESENCEのコントロールにそれぞれ異なるトップエンドの周波数帯が設定されています。各コントロールが全体のミックスに対してどのように作用するか、そしてお好みのスタイルやキャラクター、レスポンス、アタックのセンターポイントに応じてどのようにトップエンドを使い分けるかを考えてみましょう。早いうちに少し時間を費やしてトーンやダイナミクスのコントロールに慣れていただければ、音作りにかかる時間を短縮でき、アンプの楽しみ方をより広げることができるでしょう。

TREBLE

GAINがプリアンプセクションで最もパワフルなコントロールなのに対して、TREBLEはそれに次ぐ影響力を持っています。TREBLEコントロールはサウンドのキャラクターやレスポンスを形成する役割があり他のトーンコントロールを上回る影響力があるので、リッチでバランスのとれたサウンドを作る上でこのセッティングは非常に重要です。TREBLEの設定には細心の注意を払ってください。TREBLEの設定はTONEコントロールでハーモニーを形成するのに極めて重要だと理解した上で慎重に行わなければなりません。

TREBLEコントロールの真ん中の領域はベストなバランスのサウンドで、十分なブライツがありながらそれでいてリッチでウォームなサウンドとなります。まずは11時付近にセットして、最適なバランスになるまで微調整することをお勧めします。しかし、MESAの持つ“もう一つの側面”から生み出された、ツイードアンプをベースとするDNAを有する回路では、TREBLEとPRESENCEの設定を低めに設定したよりウォームなサウンドが好まれる傾向にあります。ギターに使用されている木材やピックアップそして演奏技術にもよりますが、TREBLEとPRESENCEの設定が12:00以下、場合によってはさらに低く設定しても実際素晴らしいサウンドが得られます。これは、MIDの帯域が広くトップエンドに近い音域もカバーしているため、カットしたトップエンドを補うからです。

DRIVEモードとHIモードにおいては、MIDコントロールはTREBLEにいくらか近い領域をカバーし、そのセンターは中高域と中低域と連動しています。この特異性を有効に使うと、TREBLEを“通常”よりも低めに、反対にMIDを少し高めに設定してみてください。TREBLEを低め、または極端に低くしたり反時計回りに回し切ると、とてもクールなサウンドが得られます。これら2つのパワフルなコントロールの相互作用をチェックして、頭の中で聞こえるサウンドを現実のものにすることが重要になります。

MID

MIDコントロールはミッドレンジの幅広い帯域を作用し、TREBLEのセクションでも述べたように、「ロートレブル」と呼べるような帯域の成分もこのMIDに少なからず含まれています。これはTREBLEがカバーしている範囲よりも低い帯域ですが、全体のミックスにおけるパンチやカットを決定する上で重要な成分です。

CLEANモードでのリズムプレイでは、MIDを低めの設定(7:30~10:00)にするとミッドレンジのアタックがスクープされ、ボトムエンドが生き生きとしてきます。それと同時に倍音がトップエンドをくっきりと形作り、きらきらとしたチャイムのようなオープンなサウンドになります。この設定にするとコシのある音になり始めて、しなやかな弾き心地に変わります。シングルコイルのギターを使えば、しなやかで柔らかいアタックと弾むような低音のキャラクターを得られます。ブルーズやR&B、カントリーなど、クリーンなレスポンスのある音色を多用する様々なジャンルにマッチします。

MIDの中間の領域(10:00~1:00)ではパンチとアタック感が性急に主張し始めます。マホガニー材を使用したギターにはこの範囲が最もマッチしており、カットやディフィニションの強いサウンドになります。ここがMIDコントロールの周波数帯でトップエンドが顔を出し始めるポイントです。コードの響きがチャイムのように始め、切れがよく前面に出た心地よいキャラクターになります。

1:00~5:30の領域まで上げるとMIDはアグレッシブになり、だんだんと音が前面に出てきて目立ってきます。ここまで上げると、MIDに隠れてしまったトーンのリッチさとウォームさをBASSを同時に上げて底上げしないといけなように感じることでしょう。MIDをこのレベルまで上げた時のアタックや性急さがお好みであれば、MIDに寄りすぎたトーンカーブを補うために、他の全てのコントロールを上げる(ただし、それに合わせてMASTERを下げることをお勧めします)必要があります。しかし、全てのトーンを競うように上げていくことで、プリアンプセクションのヘッドルームが失われてしまう可能性があります。トーンコントロールからの出力が高すぎるせいでクリップしてしまう場合は、どこかで引き返す必要があるでしょう。

MIDを上げた場合も、GDRIVEモードやHIモードのゲインサウンドと同じ状態になってしまいます。低めの設定(7:30~10:30)にすると広がりのあるサウンドで、跳ねるようなフィーリングのコードサウンドや、シングルノートのプレイではクリーミーでスムーズなトーンが得られます。Gain回路によって作られる高次倍音成分の大部分はTREBLEによって大きくコントロールされますが、立体的で倍音に富んだキャラクターが彩ります。

MIDが10:00を超えると、豊かでパンチのあるミッドレンジが主張し始めサウンドの抜けやバイト感が現れ始めます。使っているギターやピックアップにもよりますが、このポイントこそが「70'sらしいクランチ」と呼ばれるトーンなのです。このMIDの強さがサウンドにインパクトをもたらす上で肝要であり、過去40年間にロックの象徴とされたミディアムゲインのトーンを鳴らす上で重要な点なのです。DRIVEとHI両モードでは、シングルノートのサウンドはスピードやウォームさを伴いながら大きく前へ出てきます。

MIDを1:00以降にすると中域の周波数で抑えられていた激しさが解き放たれ、トップエンドが増加し始めます。ここは、TREBLEコントロールよりもより広い範囲で、より前へ出るアグレッシブなアタックを見つけ出せる領域です。ピッキングへの反応も機敏になるため、あなたの演奏がより顕著にアウトプットされます。この領域は、ロックで使われるようなリズムギターをミックスの前面にプッシュする際にとても有用です。反応が素早く正確なため、単音のソロプレイでは繊細なプレイまで忠実に出力します。

これは注意というよりも助言ですが…MIDコントロールには、慎重に扱わないと耳障りになりかねない音域が含まれています。キャビネットから出る音によく耳を澄ませて、オーディエンスやマイクに対してどのように響いているか確かめるようにしましょう。MIDを上げすぎると、不快にさえなりかねないインパクトの強さに驚くかもしれません。観客の耳を傷めたくないのなら、上げすぎはお薦めできません。MIDを下げた設定でも、バランス感やウォームさを保ちつつ、耳を傷めずに十分なアタック感や明瞭さを得られます。

BASS

BASSコントロールは、サウンドに丸みをつけるリッチなボトムエンドを広い帯域でブレンドします。異なるモードが選択されると内部のスイッチが作動し、サウンドスタイルに合わせて低域の周波数と量が変化します。これはそれぞれのサウンドにとって非常に重要なトーンキャラクターの大部分を占めています。

CLEANモードではより低めのBASSの帯域をコントロールして深みや立体感、エアー感をサウンドに加えます。DRIVEとHIGH両モードでは、BASSのより高めの帯域をコントロールしてレゾナンスを作り出し、追加されたゲインによってサウンドをタイトかつ軽快にします。この帯域はCLEANモードの低めの帯域と比較すると、おそらくここでは妨げになる帯域となりますが、より大きな割合で使用することができます。これらの2つの帯域でそれぞれ異なる設定が出来るということが、チャンネル間でバランスよく、フットスイッチ操作によって素晴らしいサウンドを生み出すのに重要なのです。

CLEANモードでは、サウンドにウォームさや迫力をブレンドするのにBASSコントロールでバランスを取ることが出来ますが、ミックスの中でアタックやきらめきは強くはありません。GAINの設定によっても異なりますが、GAINをより低めにすると少し高めのBASS設定が可能になります。ベストなポイントについては色々試してみることが必要ですが、大まかなガイドラインとしては、GAINを上げたらBASSは下げたほうがよいでしょう。このアプローチに従えば、より簡単にすばらしいサウンドを見つけることができるでしょう。

サンプルセッティング例:

GAIN 12:00 — BASS 1:00

GAIN 1:00 — BASS 12:00

GAIN 2:00 — BASS 11:00

繰り返しますが、これはあくまでコンセプトの大まかな例です。使用するギターやキャビネット、部屋の音響やステージ上の状況、屋内/屋外などによっても大きく変わります。

DRIVEモードとHIGHモードのBASSコントロールの高めの帯域は、CLEANモードの低域の設定よりもより高い設定が可能です。BASSの設定を12:00から3:00ぐらいに設定するのが一般的です。BASSを高めに設定するときはGAINを低めに、GAINを高めに設定するときはBASSの設定に注意することが必要です。GAINを下げる(9:30～12:30)と、サウンドがよりタイトになり、BASSコントロールによって豊かなローエンドのエア感を作り出せます。GAINによって音が歪み始めると(12:00～5:30)、音が分厚くなって低音が薄まり迫力が出てある一定のポイントまで低音の帯域は落ち着き始め、スタイルによっては妨げになることもあります。

さらに良い点として、BASSは他のコントロールからの影響を受けづらいことです。GAINとの比率さえ考慮すれば、ある程度バランスのとれたサウンドに設定できます。TREBLE、MID、およびPRESENCEは、中～高域からTREBLEが影響するよりもさらに高い倍音にかかわる音域までの幅広い範囲をカバーしており、重複している帯域もあります。一方、BASSはリッチなローエンドを操作できる唯一のコントロールなのです。

PRESENCE

このコントロールはTREBLEよりも上の帯域を調節するもので、通常のトーンコントロールよりもシグナルパスのさらに下流のパワーアンプセクションに位置しています。PRESENCEはパワーアンプで高音域を絞って引き締まった影のあるトーンを作ったり、高音域を開放して倍音を響かせたりするのに有効なコントロールです。信号のダイナミックさや、アンサンブル内での抜けの良さを決定づけるのにも大きな役割を果たします。

低めの設定(7:30～10:30)では、コンプレッション感を伴った暖かく丸いサウンドになり切迫感のある高域のダイナミックなアタックは絞られます。設定を上げていくと(11:00～2:30)トップエンドの占める割合が増えてゆき、コンプ感よりも“抜け感”が強くなりダイナミクスのピークが性急になります。設定をトップエンド(2:30～5:30)まで上げると強烈にアグレッシブなアッパーハーモニクスがサウンドを支配していき、注意深く調節しないと危険な領域に入ります。タフな耳でも高音が切り刻むように感じられるかもしれませんので、レコーディングなど別室でサウンド処理を行う際などにのみ意図して使うことをお勧めします。その場合であっても、低音弦の響きを目立たせるために使うのが良いでしょう。この最高音域は、PAでよく使われるようなマイクの特性と組み合わせると、見当はずれの音が強調されてしまう恐れがあるので、観客やバンドメンバーの反応を気にしつつ注意して調節してください。

クリーンサウンドでは、ドライブしたサウンドを作る時よりもPRESENCEを少し上げた設定(10:30～12:30)にする方が良い効果があります。サチュレートし始めると、PRESENCEコントロールの範囲内の帯域は刺々しく、不安定になっていきます…注意しないとノージーになりかねません。オーバードライブでのコードワークは、通常であれば丸みを帯びさせたまま、ボーカルを引き立てるために11:00以下に留めたいところですが、単音プレイよりも高めの設定(10:30～12:30)も許容できます。

NOTE: 先述したように、トップエンドの帯域はTREBLE、MID、PRESENCEの3つで重複しています。それぞれがトップエンド全体における独自の帯域やパワー(影響度)、そしてキャラクターを持っています。そのため、音作りの際は3つのコントロール全てを使って各音域のバランスを調節してください。

REVERB

FILLMORE™はアナログのオールチューブスプリングリバーブ回路を採用しており、微かなかり具合からフルウェットの“Surf”レベルまで、このアンプのヴィンテージインスパイアされたキャラクターを際立たせる瑞々しく広がりのあるアンビエントリバーブエフェクトを生成します。これはアンプ全体で最も扱いやすいコントロールです。なぜなら設定した通りに音が聞こえる上に、全体の音量や倍音の響きともあまり関わりがなく、他のコントロールから独立しているからです。

そうは言っても、BASSと同様に、GAINを上げていくにつれてリバーブの設定も注意して調節する必要があります。しかし幸いなことに、これもさしたる問題にはならないでしょう。というのも、ゲインを上げたがるプレイヤーの多くは、音に広がりを持たせるためにリバーブよりもディレイを好んで使う傾向があるからです。しかし例外的に、ブルーズやルーツミュージックを演奏する際に、盛り上がるポイントでオーバードライブがかったリズムギターを弾きたいという方がいるかもしれません。

クリーンアンプのボリュームを上げることで好みのフレーバーを作り出す、伝統的な“クリップしたクリーンサウンド”の世界では、リバーブタンクが生むサウンドやそこへのオーバードライブしたインプットは、それらを増加するアナログ回路と相まって、オーセンティシティやヴァイブを醸し出す上で必要不可欠な要素です。このような使い方をしてみたいのなら、CLEANモードでプリアンプ部のGAINコントロールを上げて、同時に好みのサチュレーションが得られるまでREVERBを上げてみてください。

ただし、リバーブはその構造上、内外からの物理的な刺激に影響を受けやすい性質を持っています。本機を大音量で使用したり、外側から衝撃を与えたりすると、サウンドにも影響が生じます。また、特定周波数の音との共鳴により、予想外の働きをする場合もあります。分かりやすい例ですが、リバーブを上げすぎると特定の音域を弾いたときにフィードバックが起こります。このような異常が起こらないように設計やテスト段階で可能な限り注意しましたが、トラックや飛行機での長時間の運搬や、ライブ中の大音量やステージの振動に影響されて、リバーブの設計上の限界を超えてしまう可能性もなくはありません。注意して運搬したり、演奏環境で振動に影響されないように考えてセッティングしたりすることで、異常の回避や最小限に抑えることはできます。しかし、もしこのような問題が疑われた際は、まずREVERBの設定を下げて、状況に応じて他のコントロールも下げることで解決できないか試してみてください。

MASTER 全体のアウトプットレベルを決定するこのコントロールは、プリアンプセクションの最終段に位置します。GAINコントロールとの組み合わせでプリアンプセクションの信号の強さを(チャンネルのパラメーターを含みます)自在に調節して、好みの音量で演奏できます。チャンネルでコントロールの設定が終わったら、MASTERコントロールで各チャンネルの音量のバランスを取って下さい。

チャンネルごとの演奏ボリュームを調整するのに加えて、MASTERはシグナルパスの上流にあるGAINの設定と連動して、EFFECTS LOOPにおけるSENDのレベル設定としての役割も果たします。幅広いサウンドを出力できるようにレベルはSEND回路で最適化されているので、エフェクトループを使わないことでトーンの正確性を保つ、というような気遣いをする必要はなく、トーンを損なわずにプロセッサを正しく機能させられます。ただし、シグナルパスに含まれる全てが“トーンを形成する要素”になるため、アンプのシグナルパスの中央のエフェクトループに配置するプロセッサを選択する際には、優れた入出力回路、エフェクトプロセッサやエンジンをもったハイクオリティなプロセッサを使用することをお勧めします。全てのチャンネルにおいての通常そして最適なパフォーマンスを得るには、MASTERコントロールの設定を9:30~1:00の範囲に設定します。すばらしいサウンドの多くは、ステージで使用するのに適切な音量として10:00~12:00あたりの設定で得ることができます。

ヴィンテージアンプ信奉者の一部の方々は、まずMASTERを最大にしてから好みの音になるまでGAINを上げる、という使い方をするかと思いますが、この方法が最もピュアな音を得られると考えてそうするのかと思います。理屈の上では、1つのコントロールをシグナルパスから取り除くことになるため、ある意味ではその通りなのでしょう。しかし、彼らが想定する“マスターコントロール無しのヴィンテージ”アンプの多くも、プリアンプセクションからのアウトプットやパワーアンプセクションの感度を調節するためのディスクリート抵抗を備えています。

そのような意味では、MASTERコントロールはセッティングの可能性を無限に広げることができる可変抵抗に過ぎず、サウンドの損失は一切なく幅広く使用することができるのです。それでももしこのようなオールドスクールなアプローチにこだわるなら、それも試してみるとよいでしょう。それでアンプが故障するようなことはありませんが、この使い方はGAINとMASTERの組み合わせによるアンプ本来の音作りの幅を大幅に狭めることになります。また、エフェクトループに接続する機材へのインプットレベルの調節に苦労することも考えられます。

CHANNEL SELECT この3ポジションのミニトグルスイッチで、フットスイッチを使用していないときに2つのチャンネルを選択できます。フットスイッチを使用するには、センターポジションのFT.SW.を選択します。

MODE SELECT 各チャンネルには3つのプリアンプ・モード(CLEAN、DRIVE、HI)のいずれかを選択できるMODE SELECTスイッチがあります。チャンネルの構成は全く同一です(ただし、実際のポットの値の微妙な個体差は除きます)。

POWER 本機に電源を供給するためのスイッチです。電源のアースがとれていることと、またコンセントにも適正な電圧が供給され、プラグも正しく接続されていることを確認しましょう。付属のもの以外の電源ケーブルを使用しないでください。アンプに損傷を与えるだけでなく、あなた自身に電気ショックが走ったり、保証が無効になったりする可能性もあります。必ず下記のコールドスタートの手順に従ってください。STANDBYをONにする(右側にする)前に真空管を温めるようにしてください。真空管やその他のパーツを長持ちさせるために必要な手順です。

STANDBY この大きなトグルスイッチでパワー管に入力される高電圧を操作します。コールドスタートの手順に従うことで、ON時の真空管への負荷を軽減してアンプを長持ちさせます。電球と同じように、真空管は電源をONにするタイミングで最も大きな負荷が加わります。このショックを最小化してゆっくりと温めることで、真空管の寿命を延ばすことができます。

POWERスイッチをONにする前に、STANDBY状態(左側)になっていることを確認してください。POWERスイッチをONにしたら、30秒ほど待ってからSTANDBYスイッチをON(右側)に切り替えてください。STANDBYスイッチは演奏を中断する際(楽器の持替やケーブルの交換、休憩時など)にミュートしておくのにも便利です。長時間STANDBY状態にしていてもさしたる影響はありませんが、1、2時間も使わない場合は電源を切る方が賢いでしょう。電気をムダにすることはありません。再度電源を入れる時も、上述のコールドスタートの手順に沿うようにしましょう。例えばアンプがまだ温かい状態であってもです。真空管内のフィラメントは、外側のガラスよりも早く冷めてしまいます。電源が切れた後すぐに「コールド」状態に戻ってしまうのです。この手順を厳密に守り続ければ、真空管の不良に起因する様々な問題を回避して、実質的にアンプの寿命を延ばすことができます。

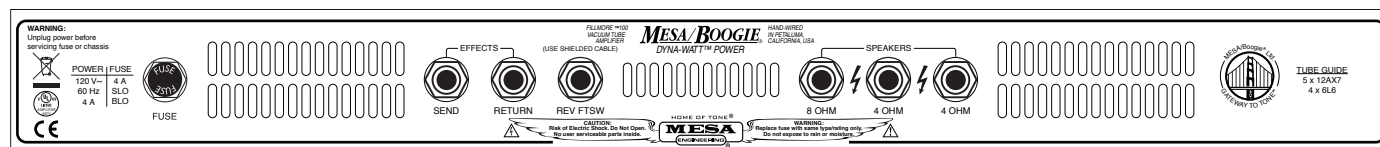
コールドスタートの手順:

(3分以上スイッチをOFFにする時は、必ずこれに従ってください。)

1. STANDBY スwitchをSTANDBY(左側)に切り替えます
2. POWERスイッチをON(右側)にします
3. 最低30秒以上待って真空管をウォームアップします
4. STANDBYスイッチをON(右側)に切り替えます

NOTE: コールドスタートの手順は、真空管の寿命や信頼性を最大化するために重要な要素です。電球と同じように、真空管の消耗は主に電源をONにする際(最初の数秒間)に生じます。電球の場合は、調光器を使って起動時にかかる電圧を落とすことで寿命を延ばすことができます。STANDBYスイッチは調光器と同じ役割を果たします。上記の手順に従うことで、寿命を延ばしたり、ベストなパフォーマンスを発揮したりする効果があります(特にアウトプットチューブに対して)。

REAR PANEL



電源コネクター(リアパネル下側)

付属の電源コードを接続するコネクターです。適正な電圧が供給されているコンセントから、付属の電源コードを使ってここからアンプに電源を供給します。なお、付属の電源コード以外のご使用は絶対におやめ下さい(アンプや接続機器にダメージを与えることがあります。またその際の保証は行いません)。

FUSE

これはACメインヒューズで、外的要因による電源の過大入力やパワー管の不具合から回路を保護するためのものです。ヒューズが切れたら、必ずSlo-Bloタイプの同じ規格のヒューズへ交換してください。100Vバージョンには、4AのSlo-Bloヒューズが必要です。パワー管のショートまたは故障は、多くの場合ヒューズが切れることで発生します。ヒューズ交換後は、STANDBYスイッチの項に記載されているコールドスタートの手順に従い、STANDBYをON側にした後パワー管の状態をチェックします。パワー管の状態が悪くなかったりアーク放電していることを確認した場合はただちにSTANDBYスイッチをSTANDBY側にして、必要に応じてパワー管とヒューズを交換してください。

EFFECTS LOOP (SERIES)

これらの2つの1/4" ジャックは、エフェクター/プロセッサーを接続するポイントになります。エフェクトループは基本的にプリアンプの最終ポイントからドライバーステージへのブリッジの回路で、SENDジャックはプリアンプを通過した信号をピックアップし、RETURNジャックはドライバーチューブ直前のパワーセクションへと信号をフィードバックします。

この接続ポイントに外部プロセッサーを接続することで、最高の音質とS/N比で使用することが可能です。ここはFILLMOREのサーキットパスにおける重要な接続セクションであり、ここにインサートしたものは全てアンプの全体的なパフォーマンスに影響を与える可能性があるということです。

エフェクトループはシリーズ(直列)ループです。ループの影響を受けないピュアな信号が取り出されループの信号が後でミックスバックされるパラレルループとは異なり、信号全体がループを通過します。そのため、ループ内で使用するデバイスの品質やパフォーマンスは、アンプから最適なサウンドとパフォーマンスを得るために大変重要です。パフォーマンスにおいてアンプと良いマッチングが得られるかを判断するために、機材を購入する前にはチェックされることをお勧めします。1つのヒントが価格です。どの分野でもそうですが、大抵の場合は支払う価格に応じて広い意味合いで商品の品質と音響性能が得られることでしょう。テクノロジーの競争は恐ろしいペースで進んでいて機能的に常に最先端のものが目指されますが、アンプに求めるサウンドやフィーリングはあなた自身が決めるものであり、エフェクトプロセッサ機器を選ぶ際、そして・・・結局のところ、100%アナログオールチューブのアンプのシグナルパスの真ん中に挿入するものがどのようにそのパフォーマンスに大きく影響するかということを考慮すれば、その場合にもアンプと同様程度の判断をされることをお勧めします。

お使いのプロセッサを接続するには:

1. SEND端子からプロセッサのINPUTに接続します。
2. RETURN端子からプロセッサのOUTPUTに接続します。

これで接続は完了です。

可能な限り最短のシールドされているケーブルで接続することを心がけてください。長いケーブルを使用する場合は、バッファードを使用してください。アンプのエフェクトループはバッファードされていますが、ケーブルの長さが長くなればなるほどサウンドに不具合が発生する可能性が高まります。

プロセッサをエフェクトループに接続するときは、シールドされた高品質のケーブルを使用してください。プロセッサの品質をチェックし、またレベルをマッチさせる1つの方法として、以下の簡単なテストを行ってください。まず、プロセッサをループに接続せずにサウンドを設定します。アンプのみでサウンドを聴いて、フィーリングを覚えてください。次にプロセッサをループに接続します。そして上記と同じくサウンドを聴いてみてください。FILLMOREのSENDとRETURNからケーブルを外してサウンドが良くなったりレベルが上がったりするようであれば、プロセッサ側のレベル設定が低すぎるのが原因です。また、プロセッサのインプットレベルやアウトプットレベルコントロールでレベルのバランスがうまく取れない場合、プロセッサ自体の仕様がエフェクトループにマッチしていない可能性があります。

エフェクトループからケーブルを外して信号レベルが下がってしまう場合は、プロセッサ側の入力レベルまたは出力レベルを下げてください。プロセッサをエフェクトループに接続したり、エフェクトループから再度取り外す作業を繰り返して、レベルに差がなくなるかまたは差がごくわずかになるまでテストを繰り返してみてください。

REVERB FOOTSWITCH この1/4" ジャックにオプションのフットスイッチを接続して、リバーブのON/ OFFをリモートコントロールすることができます。リバーブをコントロールするには、シールドされているケーブルを使用して、標準的なラッチング(モーメンタリではない)タイプのフットスイッチを使用することもできます。

SPEAKER OUTPUTS キャビネットまたはコンボの場合は内蔵スピーカーへのスピーカーアウト端子です。前述のように、他のスピーカーとの互換性からサウンドに至るまでの数多の理由から可能な限り8Ωの負荷を推奨しており、そのインピーダンスにおいてアンプが最高のサウンドを出力するようにします。1x12コンボ内蔵の8Ω100Wスピーカーは、8Ωスピーカーアウト端子に接続してください。

MESA 8Ω 4x12 Standardキャビネットや1x12などのエクステンションキャビネットを使用してコンボまたはヘッドを使用する場合は、8Ω端子を使用してください。ほとんどのMESA 2x12キャビネットも8Ωに配線されているので、この端子で使用することができます。

2台目の8Ωスピーカーキャビネットを追加する場合、それぞれを4Ωのアウトプットに接続することをお勧めします。現行のMESAキャビネットでは、デイズチェーン接続を可能にするパラレルジャックも備えています。この構成は、8Ωスピーカーを別々の4Ω端子に接続することと同じこととなります。これにより、インピーダンスの整合性が向上し、フルパワーとヘッドルームを確保することができます。

4Ωキャビネットを単独で使用する場合は4Ω端子に接続します。

16Ωの4x12キャビネットまたは2x12キャビネットを使用する場合は8Ω端子に接続します。若干最大出力が下がりますが、他のスピーカーでカバーされるため認識できるほどではありません。2台の16Ωキャビネットを8Ω端子で使用するとより良いインピーダンスのマッチングとなり、フル・パワーとヘッドルームを得ることができます。

NOTE: <重要です!> 2台の4Ωキャビネットを使用することはできません。そのような使用に対応した設計がされていないアウトプットトランスに2Ωの過度の負荷がかかることになるからです。

以下は、いくつかの一般的かつ正しいスピーカーアウトとの接続例です；

- ・ 1台の8Ωキャビネット — 8Ωのスピーカーアウトに接続します(1台のMESA 8Ωキャビネットを使用)。
- ・ 2台の8Ωキャビネット — それぞれ4Ωのスピーカーアウトに接続するか、または1台のキャビネットをMESAキャビネットの平行インプットに接続し、2台目をMESAキャビネットの他の平行ジャックに接続します。
- ・ 1台の4Ωキャビネット — 4Ωのスピーカーアウトに接続します(4Ωキャビネットのいずれかを使用)。
- ・ 2台の4Ωキャビネット — 接続はお勧めしません！ 本機のアウトプットトランスは2Ω抵抗を接続するようには設定されていません。
- ・ 1台の16Ωキャビネット — 8Ωのスピーカーアウトに接続します(最大出力が若干下がります)。
- ・ 2台の16Ωキャビネット — 平行ボックスまたは"Y"コネクターを使用して、8Ωのスピーカーアウトに接続します。

これらの一般的なスピーカーの接続方法は、考えるであろう幅広いセッティングのほとんどをカバーすると思います。またここに挙げていない他の一般的ではない方法もあり、その内のいくつかは安全かつユニークなサウンドのものもあると思います。接続方法に迷った際は詳しい技術者に確認して、決して自分の判断で接続しないことをお勧めします。

FILLMOREの機能、コントロール、および接続端子についての説明はこれで終わりです。このマニュアルと操作ガイドが、あなたの新しいこのアンプから最高の性能を引き出すのにお役に立てることを願っています。FILLMOREの素晴らしいトーンとインスピレーションを長きにわたってご堪能いただき、そして、それがあなたの初期投資に値する喜びを幾度となく与え続け、あなたの演奏と音楽への真摯な努力をエキサイティングな新しい高みに連れて行く手助けとなるよう願っています。

繰り返しとなりますが、FILLMORE™をお選びいただきありがとうございます。私たちMESA/Boogie全員から、Cheers and Enjoy!

REST AREA



FACTORY SAMPLE SETTINGS

CLEAN

Diagram illustrating the factory sample settings for the CLEAN mode. The settings are as follows:

- INPUT FT. SW.:** FULL PWR (top position)
- CLN DRIVE:** HI (top position)
- GAIN:** 10 o'clock
- TREBLE:** 12 o'clock
- MID:** 10 o'clock
- BASS:** 12 o'clock
- PRESENCE:** 10 o'clock
- REVERB:** 12 o'clock
- MASTER:** 10 o'clock

DRIVE

Diagram illustrating the factory sample settings for the DRIVE mode. The settings are as follows:

- CLN DRIVE:** HI (top position)
- SW. NNEL:** ON (bottom position)
- POWER STANDBY:** ON (bottom position)
- Fillmore 100** logo
- GAIN:** 10 o'clock
- TREBLE:** 12 o'clock
- MID:** 10 o'clock
- BASS:** 12 o'clock
- PRESENCE:** 10 o'clock
- REVERB:** 12 o'clock
- MASTER:** 10 o'clock

DRIVE CRUNCH

Diagram illustrating the factory sample settings for the DRIVE CRUNCH mode. The settings are as follows:

- INPUT FT. SW.:** FULL PWR (top position)
- CLN DRIVE:** HI (top position)
- GAIN:** 10 o'clock
- TREBLE:** 12 o'clock
- MID:** 10 o'clock
- BASS:** 12 o'clock
- PRESENCE:** 10 o'clock
- REVERB:** 12 o'clock
- MASTER:** 10 o'clock

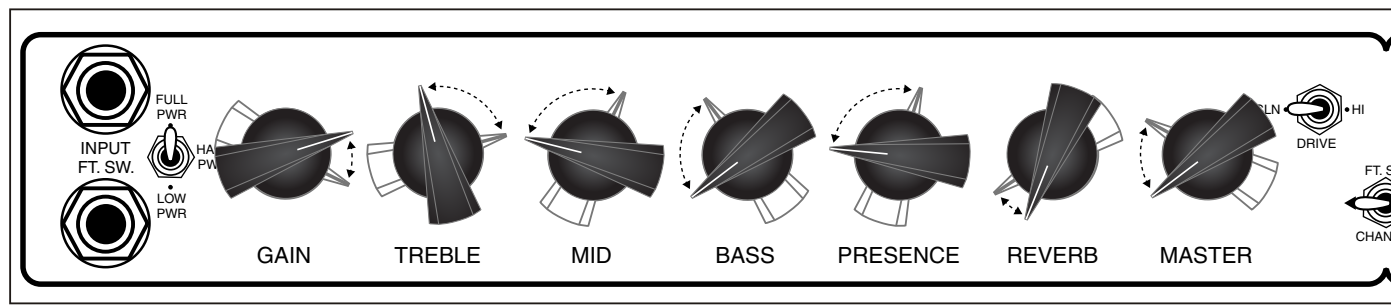
BURN

Diagram illustrating the factory sample settings for the BURN mode. The settings are as follows:

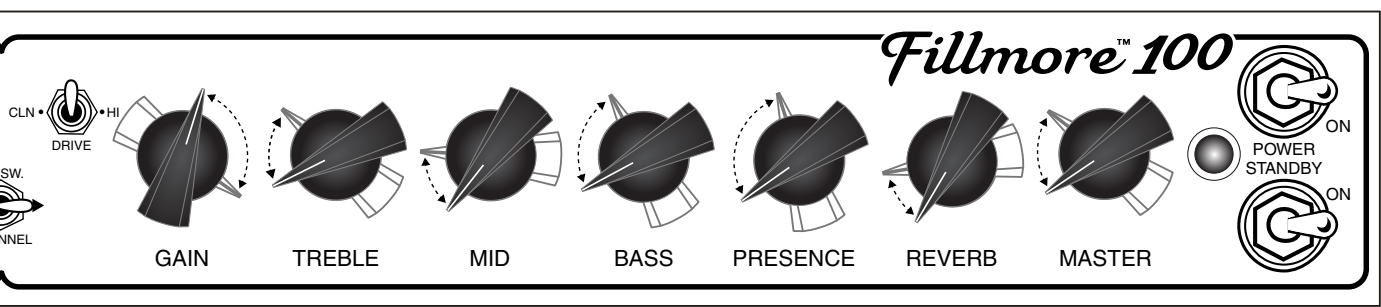
- CLN DRIVE:** HI (top position)
- SW. NNEL:** ON (bottom position)
- POWER STANDBY:** ON (bottom position)
- Fillmore 100** logo
- GAIN:** 10 o'clock
- TREBLE:** 12 o'clock
- MID:** 10 o'clock
- BASS:** 12 o'clock
- PRESENCE:** 10 o'clock
- REVERB:** 12 o'clock
- MASTER:** 10 o'clock

FACTORY SAMPLE SETTINGS

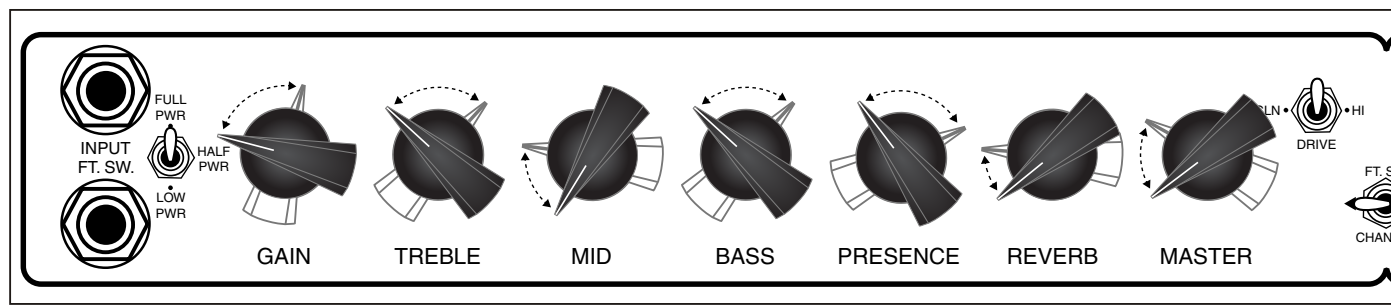
PUSHED CLEAN



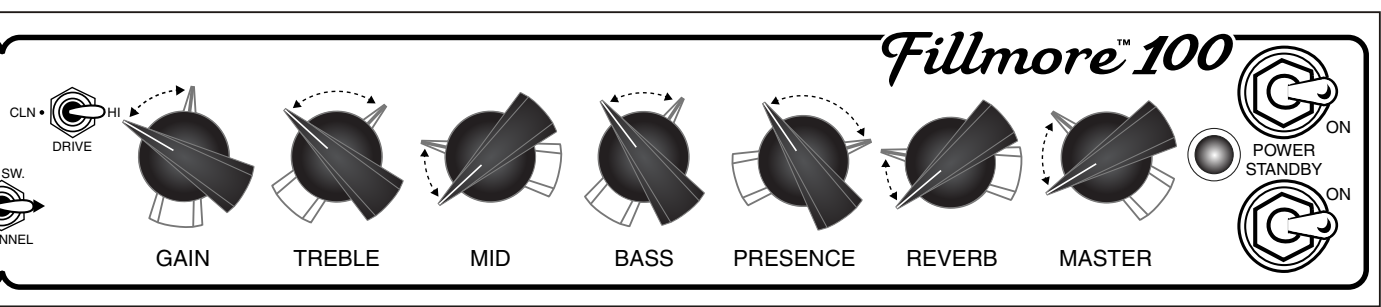
DRIVE SOLO



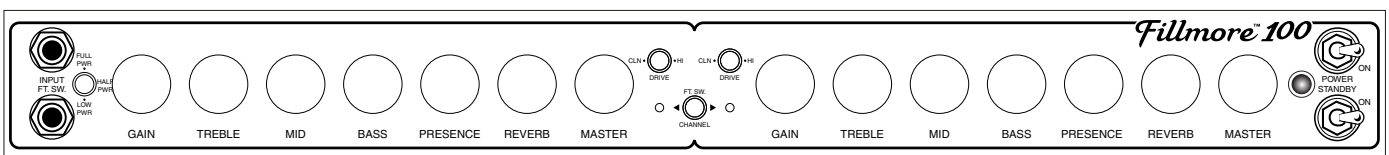
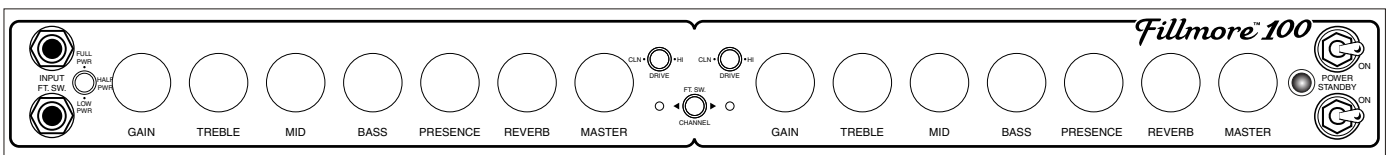
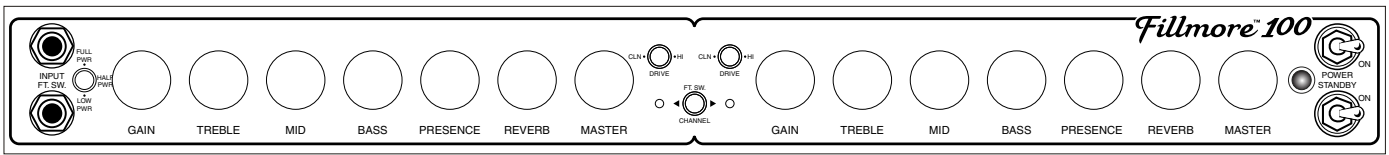
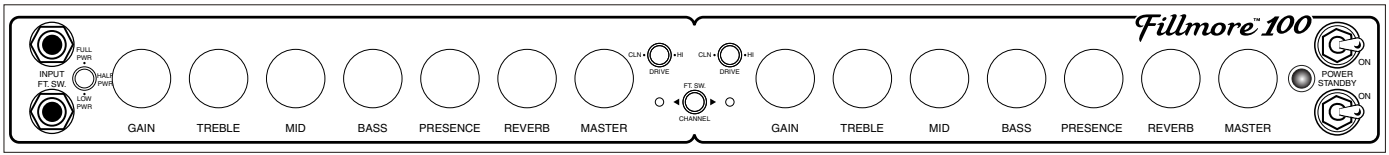
DRIVE "CLEAN"



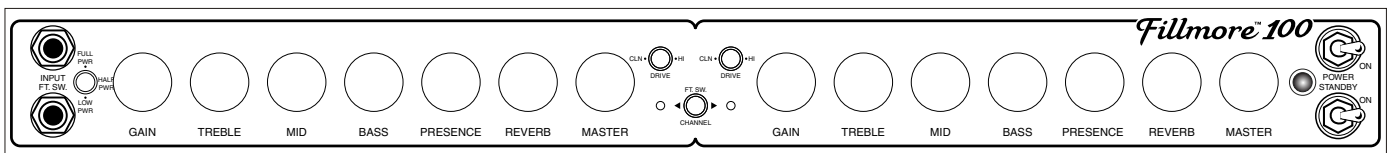
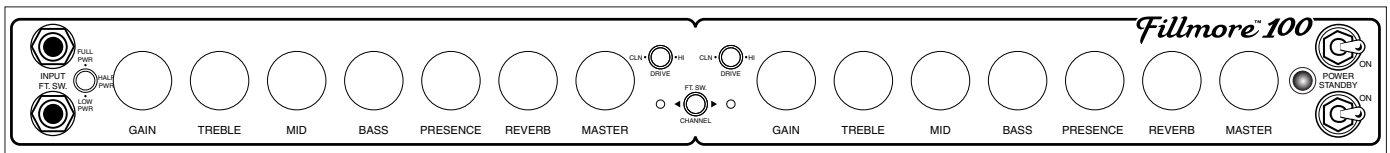
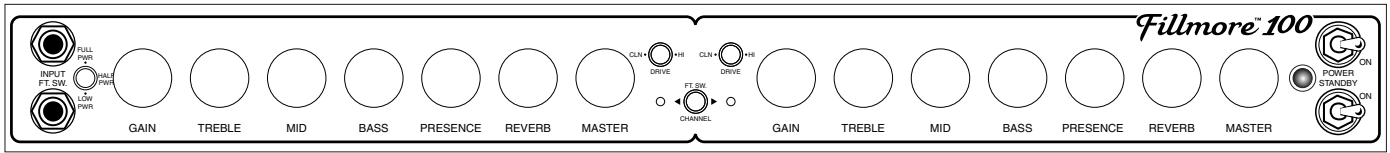
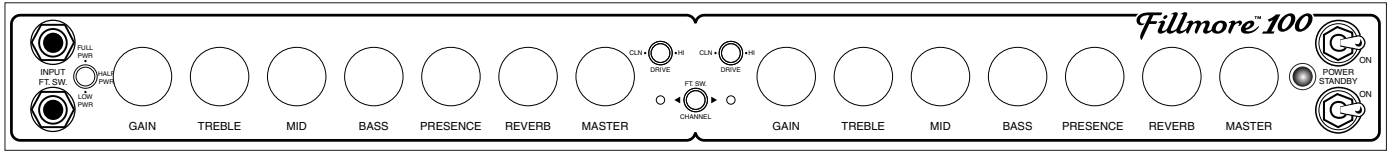
BLUES HI



USER SETTINGS



USER SETTINGS



真空管のノイズについて：

状況によって、真空管のノイズを経験したことがあるでしょう。危険性があるというわけではなく、トーンに影響するものです。真空管の交換は電球を変えるようなもので必ずしも技術者に依頼しなければならないというものではなく、実際にやってみるとそう難しいことではありません。(ですが、やはり慣れていない方には楽器店に相談の上、技術者による交換を依頼することをお勧めします)。

真空管を交換する際に最初に我々がお勧めしたいのは、アンプを安定した台の上に乗せて頂くことです(そうすれば腰を曲げることなくアンプ内部の真空管を確認出来ます)。また、真空管を交換する際に照明が当たってチューブソケットがはっきり見えます。アンプを使用した後で真空管に触る際は、大変高温になっていますので十分に注意して下さい！ まだ熱を感じる場合は、布きれ等を使って真空管を持つようにします。また真空管のシルバーの先端の下のガラス部分はあまり熱を帯びていないのでそこを持った方が交換しやすいはずで、また真空管をソケットに固定する際も、外す際と同様に優しく持ちます。

パワー管の問題を診断する：

パワー管の問題は主に二つあります：ショートか、ノイズです。たいていそのどちらかの問題に陥るのですが、診断と処理は通常シンプルです。

フューズが飛ぶときは、軽度か重度かに関わらずたいていがパワー管の故障が原因です。軽度の場合は、電子流が制御格子を超えて、過電流が流れるというものです。音が歪んだり少しハムノイズが聞こえてきたりする場合は、アンプをSTANDBYにしてすぐパワー管をチェックします(赤くなっているかを確認します)。ショートしてる管がバイアスを下げるためたいていペアの二つが熱くまた発光していますが、一つだけが熱く発光している場合は、それだけが原因です。数分間赤くなってなければ、他の二つは問題ないでしょう。

この場合は物理的に真空管の内部でショートは起こらず(電子流が暴れているだけです)、しばらくSTANDBYにしてそれからONに戻せば、一時的には問題はなくなっているはずで、それからまた真空管をチェックして、再び同じ問題が起こるようなら、問題のある真空管がオーバーヒートを起こすので特定することが出来ます。

重度の故障の場合はあまり問題は簡単ではなく、最悪の場合は真空管の内部でショートが起こり、スピーカーから大音量のノイズが発生します。その場合はただちにアンプをSTANDBYの状態にして下さい(おそらくそれまでの間にフューズが飛びます)。またそのようなショートの場合は、真空管内部の部品同士が接触し、故障の状態になります。パワー管の交換と、SLO-BLOタイプのフューズの交換を行い、このマニュアルに書いてある方法で再びアンプの電源を入れます。

真空管のノイズ：

ノイズはしばしば真空管内の汚れが原因だったりしますが、真空管のガラスを指で軽く叩いてみると、ノイズの質が変化して音が聞こえたりします。しかしながら、12AX7を指で軽く叩いたときにスピーカーから何らかのノイズが聞こえるのは通常の状態です。INPUTジャックに近い管の音は大きく聞こえるもので、何故なら二つ目の12AX7管がアウトプットを増幅しているからです。

パワー管は通常指で叩いても常に静かなはずで、叩いた時にパチパチやシーツと音を立てるときは、おそらく問題があります。パワー管のノイズを確認するには、アンプをSTANDBY状態にして、問題のあると思われるパワー管をソケットから抜いて、また戻してみます。ハムノイズが聞こえるようなときは、プッシュ・プル真空管マッチングバランスが崩れています。問題があると思われる真空管を突き止めるときはいつも、POWERスイッチやSTANDBYスイッチを常に片手で触れながら、トラブルが発生したときにすぐにOFF出来るようにしておきます。

もし問題がどこにあるか分からないときは、疑わしいものだけを新品の真空管に交換する方法をお勧めします。チューブ交換の方法については、前述の説明を参考して下さい。同じチェックをするだけなら、技術者にアンプを送って真空管交換を依頼するよりもご自分でするほうが手間ではないかも知れません(それでもやはり自身での交換に不安がある場合は、最寄りの楽器店にご相談下さい)。

プリアンプの真空管の問題を診断する：

チューブ仕様のアンプを使用したことがあれば、プリアンプの真空管ノイズを経験したことがあるかも知れません。しかし、これがすぐに故障に繋がるというわけではありませんので、安心して下さい。この不安を解消する一番の近道は、真空管を交換することです。

最初に、なるべくアンプのパフォーマンスを落とさないためにも、少なくともいくつかの予備のプリ管を準備しておくのが良いでしょう。ちょっとしたプリ管の問題というのは、主に二つのカテゴリーに分けられます：ノイズと、マイクロフォニックノイズです。ノイズの種類は、パチパチ音であったり、ホワイトノイズ、ヒスノイズ、ハムノイズ等があります。マイクロフォニックノイズとは、ゲインや音量を大きくしたときに、金属的かつ周波数の高いサウンドでハウリングを起こすものです。マイクロフォニックノイズは、楽器側の音量を絞ったり、楽器をアンプから離すことでハウリングが止まるかどうかで、問題を分けることが出来ます。

(ハウリングがピックアップのフィードバックによるものであれば、これでハウリングが止まるからです)。また機器の振動やショックによっても引き起こされます("マイクロフォンを叩く"というのが、マイクロフォニックノイズの語源になっています)。

1つのモードやチャンネルのみでプリ管の問題が起こるのであれば、その問題を解決する最善の方法は真空管の交換です。反対に、特定のモードやチャンネルにトラブルの原因が絞れない場合は、全てのモードやチャンネルに関わっている、プリ管に問題があるのかも知れません。あるいは、可能性は低いですが、ドライバー真空管に問題があるかも知れませんので、特定のモードやチャンネルに特定できない場合は、ドライバー管を交換する方法もあります。ドライバー管の問題は、一般的にパチパチ音やハムノイズがアンプの出力から聞こえる、または全てのモードでアンプの出力が弱くなるという症状となって現れます。

たまたま弱ったドライバー管がアンプのサウンドをフラットかつ生気のないものにすることがありますが、ごくまれであるため、同様の問題が生じた場合はやはりパワー管の劣化が原因と考えられます。

トラブルの原因が特定できない場合に、一番早くて確実な方法は、プリ管を同時に交換することです(その後どこに問題があるか分かったときのために、外した真空管を保管しておいて下さい)。INPUTジャックに近い真空管のサウンドがノイズっぽく感じられるかも知れませんが、それはその真空管が一番最初に信号が通る真空管であり、その後で出力が他の真空管により増幅されていくからです。その理由から、"インプット・ソケット"(通常V1と表示されています)に装着する真空管は最もノイズが少ない物を選びます。

プリアンプの後段 - パワー管の直前 - の真空管にノイズがなければ、ほとんど問題は発生しません。このアンプには最も適正な真空管が装着されていますので、真空管を交換する場合は全部一度に外すのではなく、一つ一つ外して取り付けるようにして下さい。また問題の無かった真空管に戻す時は、必ず元々装着してあったソケットに戻すようにして下さい。また真空管を交換するときは、アンプの電源をSTANDBYにしてから行って下さい(そうすることで、スピーカーから大きなノイズが出ることを防げます)。

そうしないとたとえゆっくり真空管を取り外したとしてもノイズが発生します)。

もしアンプを運搬する必要がある場合は、アンプ本体(シャーシ)を新聞紙等で包んでください。また包んだアンプ本体と段ボール箱に間に、15センチ程の隙間("クラッシュ・スペース")を空けて下さい。エアークッション("プチプチ")等で包むのも良いですが、発泡スチロールはなるべく使用しないで下さい

(運搬中に発泡スチロールが擦れて、その粉がアンプ内部に入り込み、電子部品に損傷を与える可能性があります)。

プリアンプ管は一般的には劣化することはありませんので、気分的な交換はあまり良いアイデアとは言えません。もし交換しても結果が変わらない場合は、元に戻して下さい。まれなことではありますが、もしトラブルシューティングの手順の中で損傷していることが分かった場合は、適切に交換を行って下さい。

注意：プリ管を指で軽く叩いた時に金属っぽい音がするのは異常ではありません。真空管からパチパチ音等が出力されない限りは、通常通りに使用することができます。

スピーカー・インピーダンス・マッチングと接続ガイド:

インピーダンス:

スピーカー接続において最も基本的で重要なのは、位相を正相にする事です。これにより素晴らしい音を出力する事が可能になります。これはそんなに難しい事ではありません。負荷についていくつかの事と、最適な負荷でスピーカーを接続する事を理解すれば良いのです。

MESA/Boogie アンプは、4 オームと 8 オームを扱う事が出来ます。真空管アンプは、4 オーム未満でドライブする事はしないで下さい。;これを行うと、出力トランスを損傷する可能性があります。2 オームを扱う事の出来る数少ないアンプ (例えば MESA (メサ) の Bass 400+) であれば大丈夫です。反対に高い抵抗値 (例えば 16 オーム等) の場合はアンプを傷める事はありません。

ミス・マッチング:

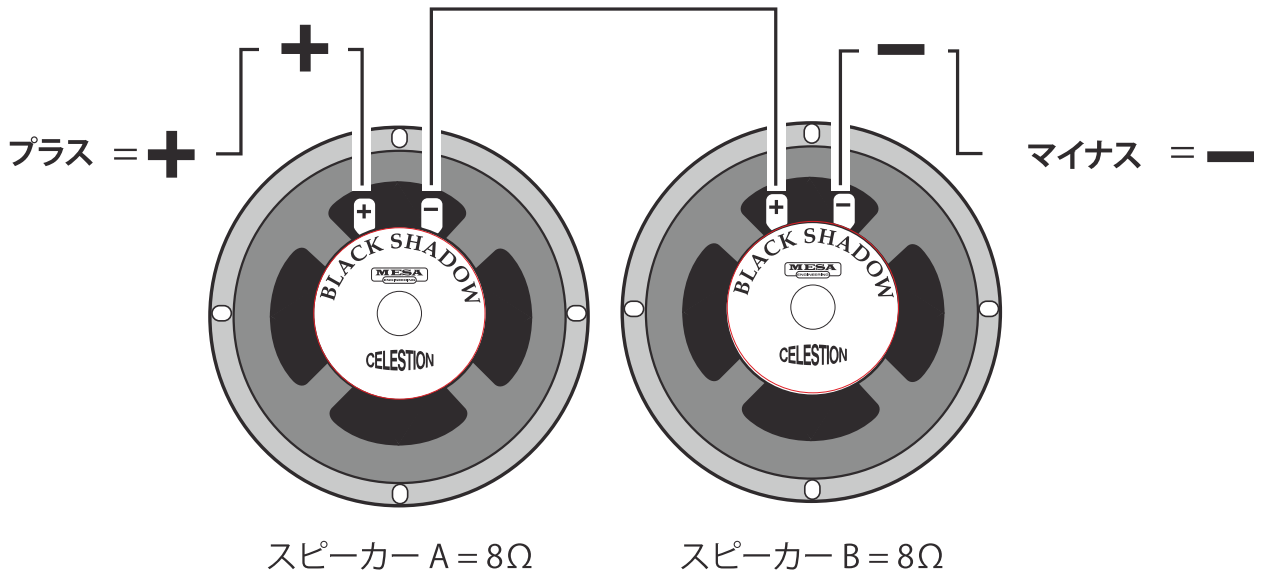
高い抵抗値 (例えば 8 オーム出力を 16 オームのキャビネットに接続) でドライブすると、少しフィーリングが異なり、レスポンスが際立った感じになります。少しのミス・マッチであれば、トーンが若干暗く、出力とアタックが少し弱く、レスポンスが少し速くなる程度です。スピーカー・キャビネットが複数になると、ミスマッチは選択肢の 1 つになるほどです。

キャビネット・インピーダンスの算出方法:

お持ちのスピーカーが 1 台の場合は、そのスピーカーのインピーダンスとアンプのインピーダンスを合わせて下さい。複数のスピーカーをお持ちの場合は、アンプにかかる負荷を計算しなければなりません。複数のスピーカーの接続方法は次の 3 種類になります。:

シリーズ (直列):

スピーカーを直列に接続した場合、それぞれのスピーカーのインピーダンスを単純に加算します。例えば、8 オームのスピーカーを 2 台直列に接続した場合は、16 オームになります。

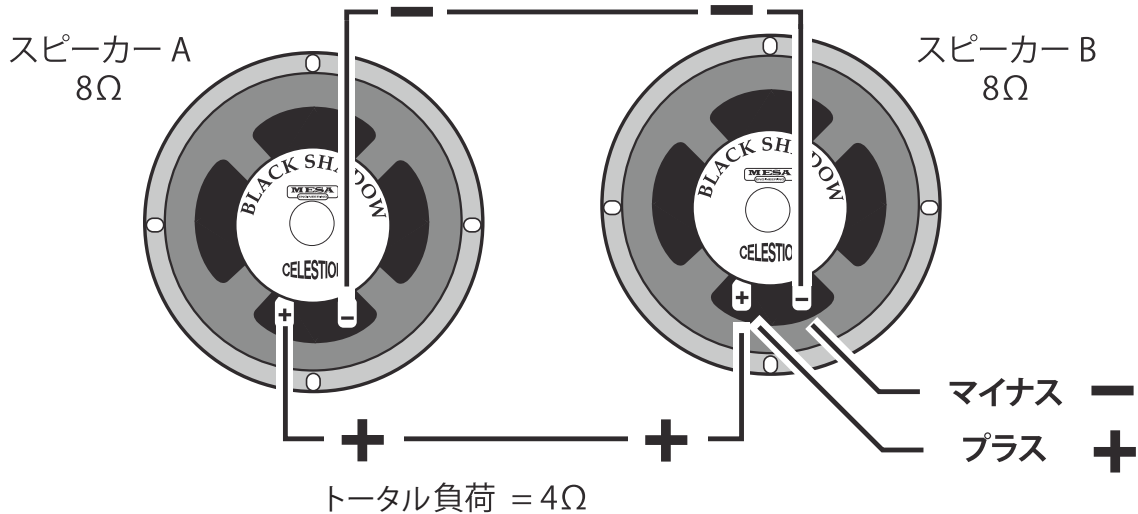


シリーズ (直列): スピーカー A のマイナス端子と
スピーカー B のプラス端子を接続

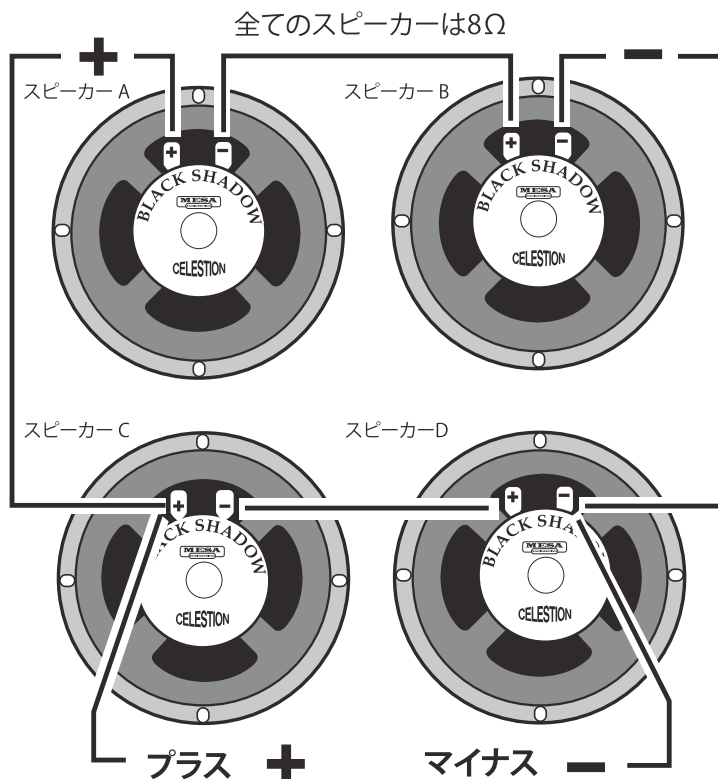
スピーカー・インピーダンス・マッチングと接続ガイド(続き):

パラレル(並列):

スピーカーを並列に接続した場合、スピーカーの抵抗値は下がります。2台の8オーム・スピーカーを並列に接続した場合、負荷は4オームになります。接続するスピーカーが全て同じ抵抗値であれば計算は簡単ですが、異なる抵抗値のスピーカー(例えば、8オームと4オーム、16オームと8オーム等)を並列に接続する場合は、少しややこしくなります。計算式は、それぞれの抵抗値をかけ算した数値を、それぞれの抵抗値を足し算した数値で割ります。例えば8オームと4オームであれば、 $8 \times 4 \div (8 + 4) = 2.6666$ オームになります。パラレル(並列):スピーカーAのプラス端子とスピーカーBのプラス端子、スピーカーAのマイナス端子とスピーカーBのマイナス端子をそれぞれ接続。



シリーズ(直列)とパラレル(並列)の組み合わせ:



これは、2セットの直列接続したスピーカーを並列に接続する組み合わせです。ここで重要なのは、全てのスピーカーの合成抵抗値が低くなり過ぎてアンプに負担をかける様にする事です。

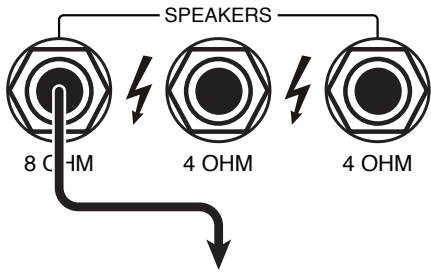
スピーカーAのプラス端子とスピーカーCのプラス端子を接続。

スピーカーAのマイナス端子とスピーカーBのプラス端子を接続。次にスピーカーCのマイナス端子とスピーカーDのプラス端子を接続。

そして最後にスピーカーBのマイナス端子とスピーカーDのマイナス端子を接続します。

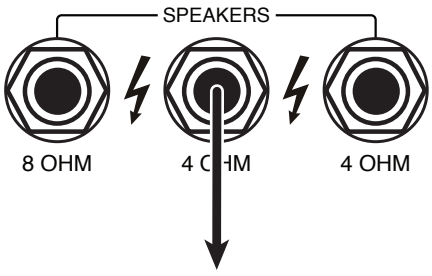
4台の8オーム・スピーカーをシリーズ・パラレル接続した時の合成抵抗値は、8オームになります。

接続方法-アンプからスピーカーキャビネットへ



①

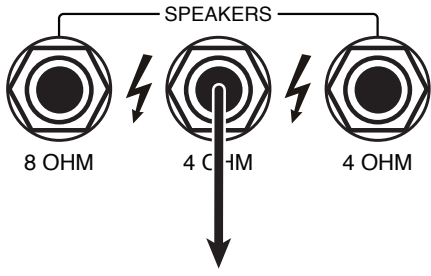
8 Ohm Cabinet



②

4 Ohm Cabinet

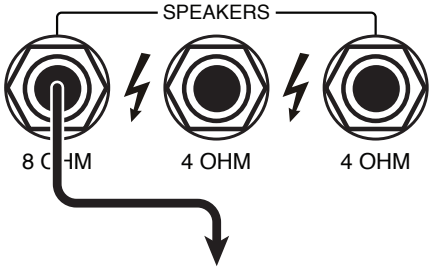
③



8 Ohm Cabinet

安全なミスマッチ

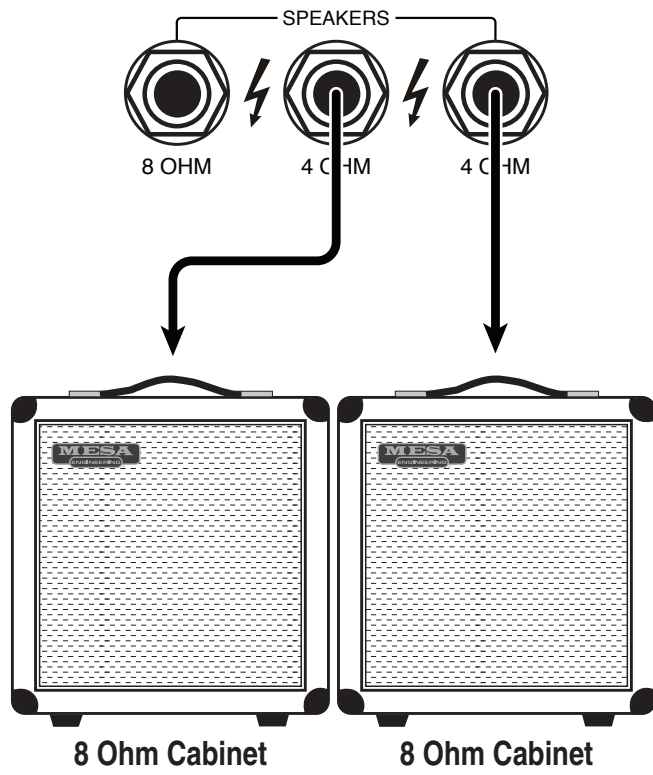
④



16 Ohm Cabinet

安全なミスマッチ

接続方法-アンプからスピーカーキャビネットへ

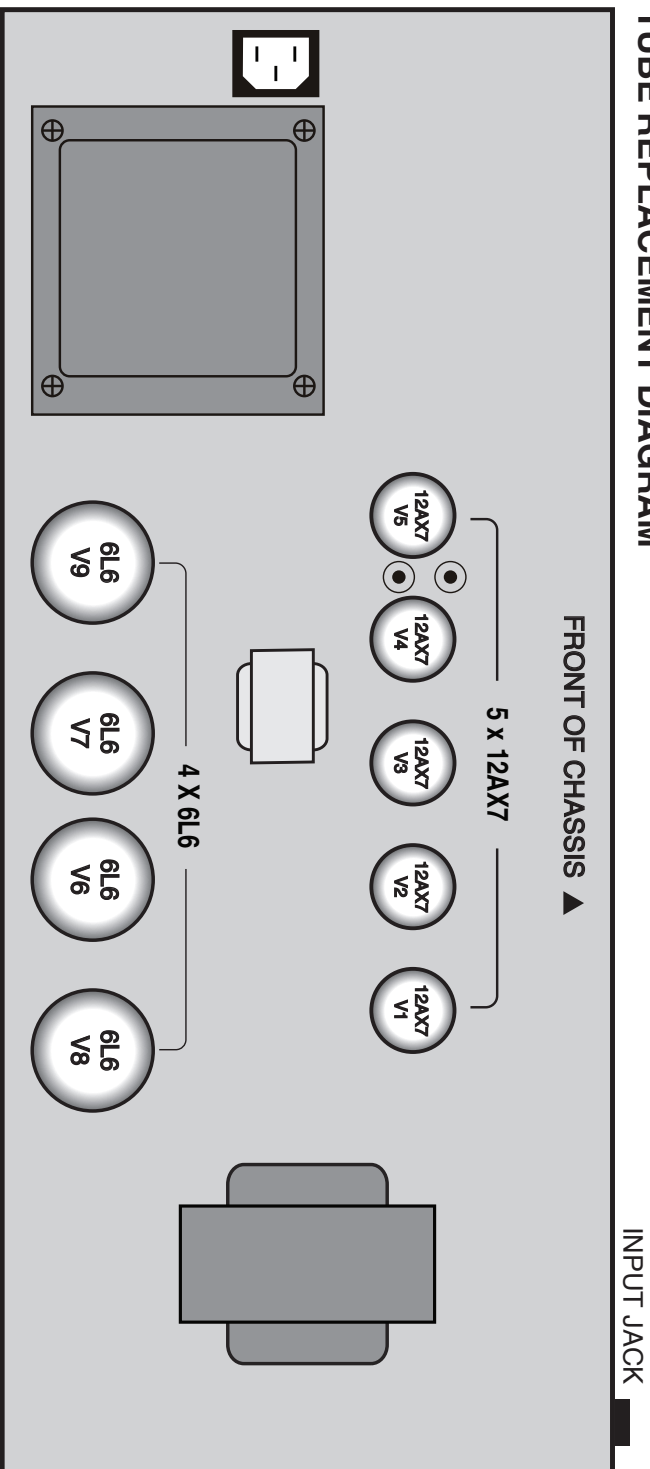


5

真空管を交換する前に、必ずPOWERとSTANDBYスイッチをOFFの状態にしてください！

FILLMORE™ 100

TUBE REPLACEMENT DIAGRAM



PREAMP TUBES

V1A - INPUT STAGE DRIVE/HI
V1B - INPUT STAGE CLEAN, 2ND STAGE
DRIVE/HI
V2A/B - TONE CONTROL DRIVER
V3A/B - DRIVER/PHASE INVERTER
V4A - LOOP RETURN
V4B - REVERB MIXER

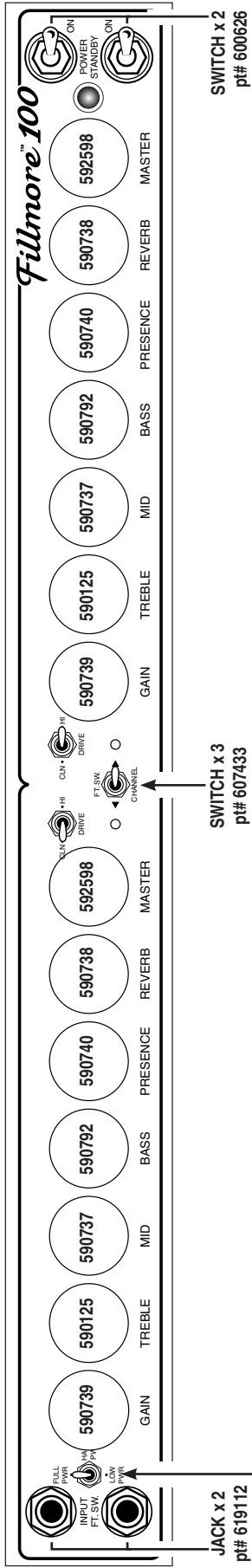
V5A - REVERB RETURN STAGE
V5B - REVERB SEND STAGE

POWER TUBES

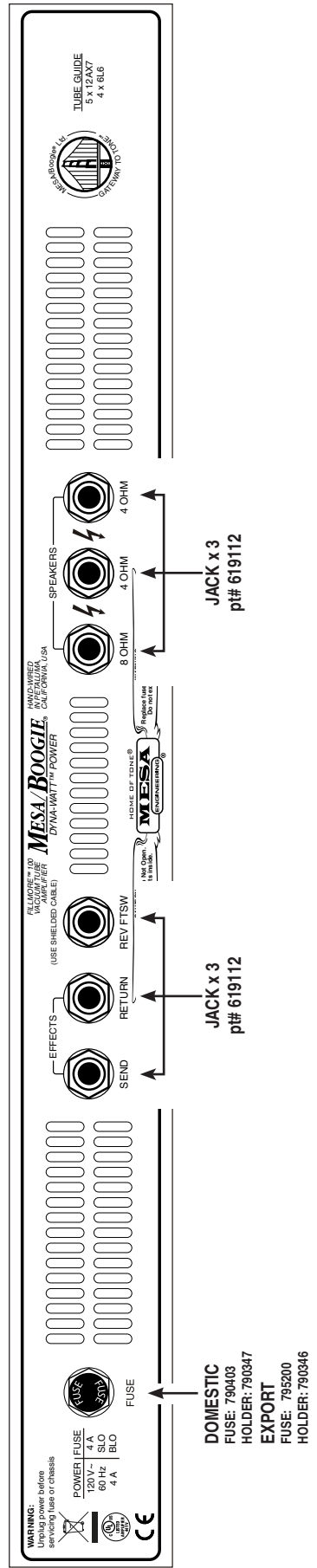
Full Power =
V6 - V9 PENTODE
Half Power =
V6 & V7 PENTODE
Low Power =
V6 & V7 TRIODE

FRONT PANEL: FILLMORE™ 100

**ALL FRONT PANEL KNOBS
PT# 408670**



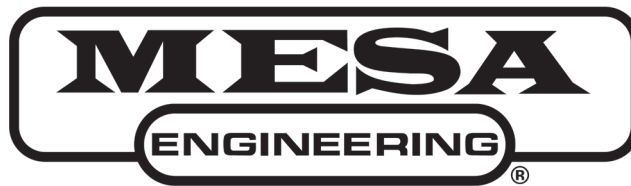
REAR PANEL: FILLMORE™ 100



MESA/BOOGIE[®]

The Spirit of Art in Technology[™]

Thank you for trusting MESA/Boogie[®] to be your amplifier company and we wish you many years of toneful enjoyment from this handcrafted instrument.



The Spirit of Art in Technology™



ギブソン・ブランズ・ジャパン株式会社

Email: service.japan@gibson.com

「@gibson.com」からのメールを受信できるよう設定をお願いいたします

お電話でのお問い合わせ窓口：0120-189433（通話料無料）

受付時間 9:30 - 17:00（土、日、祝日、年末年始を除く）